帝國新讀本 卷九

4a
810
大14

41568
教科書文庫
4
810
41-1925
20000
66897

教科書文庫
4
810
41-1925
2000066897

ヴェニス第一の盛り場。右手に大統領(ドージュ)の宮殿、左手に鐘塔、中央がサン、マルコの大寺院

ヴェニス
サンマルコの廣場

資料室

大正十四年二月十六日
文部省檢定濟

40
810
大14

文學博士芳賀矢一編

帝國新讀本

東京
合資會社冨山房發兌

広島大学
教
66897
図書
広島大学図書
2000066897

帝國新讀本　卷九

目次

△省略

一　朗詠……一
二　神武天皇と後醍醐天皇……五
三　國體の精華……一〇
△日本民族論（自修文）……一五
四　東洋の詩興……二四
五　萬里の長城……三〇
六　山の日本……三四
七　富嶽の詩神を懷ふ……四〇

八 羽衣……四四
羽衣の傳說（自修文）……五〇
九 舟旅……五四
一 別離
二 海路
三 都歸
一〇 東下り……六一
一一 千里が竹 その一……六五
一二 千里が竹 その二……六九
教化上より見たる近松（自修文）……七三
一三 儒の道をわらふ……七六

一四 國學……八〇
一五 方丈記……八四
一 うたかた
二 わづらひ
三 閑居
一六 蓮を栽う……九五
水都水郷（自修文）……九七
一七 世界の四聖 その一……一〇一
一八 世界の四聖 その二……一〇八
一九 芳宜園大人の靈を祭る……一一四
二〇 澄の江の浦……一一八

二一 菊花の約 その一……一二〇
二二 菊花の約 その二……一二五
二三 俚諺論（自修文）……一三三
二四 友道……一三六

和歌百首

目次終

もゝしきの大宮人は百敷城＝百敷＝浪山の石を積んで作った城の＝宮の枕詞

帝國新讀本 卷九

一 朝詠

春興　　劉禹錫(一)

野草芳菲紅錦地　遊絲繚亂碧羅天

春夜　　山部赤人

もゝしきの大宮人は暇あれや　櫻かざしてけふもくらしつ

春夜　　白居易(二)

背燭共憐深夜月（ソムケテヲ）　踏花同惜少年春

はるの夜の闇はあやなし梅の花　色こそ見えね香やはかくるゝ

凡河内躬恒

(一)唐の詩人。
(二)唐の詩人。

(一)平安時代の文人。天慶三年(一六〇〇年)歿。
(二)平安時代の宮女。中務卿敦慶親王の女。
(三)唐の詩人。
(四)桓武天皇の皇子。
(五)歌人。天暦二年(一六〇八年)歿、年六十。

納涼

池冷水無三伏夏　松高風有二一聲秋　源英明(一)

したくゞる水に秋こそ通ふらし
むすぶ泉の手さへすゞしき　中務(二)

杜鵑

一聲山鳥曙雲外　萬點水螢秋草中　許渾(三)

さつきやみおぼつかなきを杜鵑
なくなる聲のいとど遙けき　明日香皇子(四)

ゆきやらで山路くらしつ杜鵑
いま一聲のきかまほしさに　源公忠(五)

秋興

林間煖酒燒二紅葉一　石上題詩拂二綠苔一　白居易

秋はなほ夕まぐれこそたゞならね

(一)天延二年(一六三四年)歿、年九十六。

あきかせにはつかりのねそきこゆ
なるたかたまつさをかけてきつらむ　友則

山腰歸雁斜。
牽帶水面新虹未展巾　中

はるかすみたつを見すてゝゆくかりの花なきさとにすみやならへる　せい

(二)平安時代の文人。菅原道眞の門人。
(三)平安時代の文人。永觀元年(一六四三年)歿、年七十三。

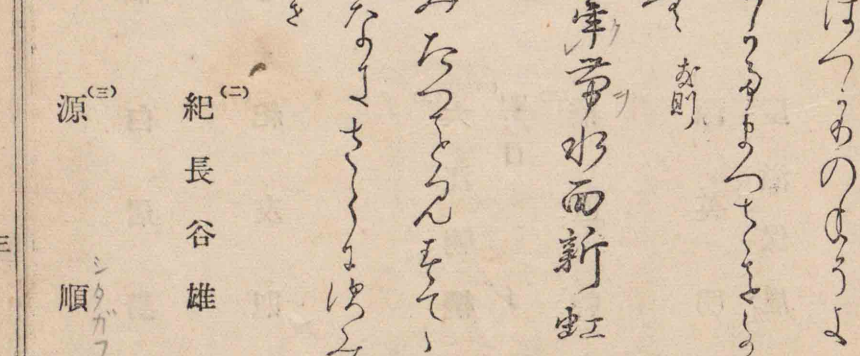
をぎの上風

はぎの下露　藤原義孝(一)

八月十五夜
三五夜中新月色
二千里外故人心　白居易

十二廻中無勝二
於此夕之好一
千萬里外皆爭二
於吾家之光一　紀長谷雄(二)

水の面にてる月なみを數ふれば
こよひぞ秋のもなかなりける　源順(三)



和漢朗詠集（傳藤原行成筆）

(一)歌人。古今集撰者の一人。
(二)儒者又能書家。村上天皇に仕へた。
(三)儒者。冷泉天皇に仕へた。
(四)平安時代の文人。

雪

雪似鷺毛飛散亂　人被鶴氅立徘徊　白居易

雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにける
いづれを梅とわきて折らまし　紀友則(一)

餞別

前途程遠馳思於雁山之暮雲
後會期遙霑纓於鴻臚之曉淚　大江朝綱(二)

おもひやる心ばかりはさはらじを
なに隔つらん峰のしら雲　橘直幹(三)

祝

嘉辰令月歡無極　萬歳千秋樂未央　源英明

長生殿裏春秋富　不老門前日月遲　慶滋保胤(四)

君が代は千代にやちよにさゞれ石の
いはほとなりて苔のむすまで　よみ人知らず

(一)河内國中河内郡。生駒山北麓の登路。

みづ〳〵し　瑞々し　若い　新鮮な　輝かな　元気のよい　美しい

二　神武天皇と後醍醐天皇

幸田露伴

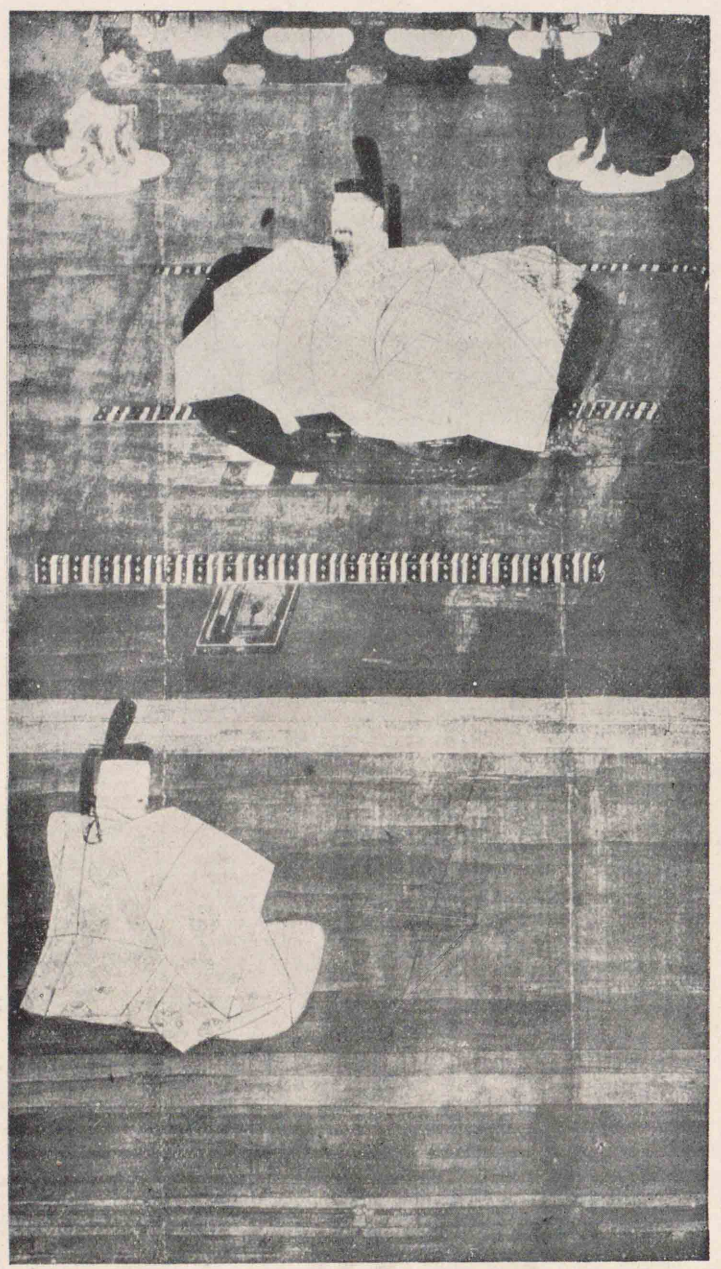
申すもいと畏けれど、我が邦創業の帝神武天皇、孔舍衙(一)坂の戰に、御兄君五瀨命を敵の矢の爲に失ひ給ひて、甚だしく御憤懣あらせられ、誓つて長髓彦に天誅を加へんとし給ひし御時は、いかに勇猛壯烈に、大御心の思し給ひしがまゝを御歌に述べ給ひしぞや。

みづ〳〵しくめの子等が粟生には、かみら一本、そねが本、そねめつなぎて、擊ちてしやまむ。

と歌ひ給ひ、又

みづ〳〵し來目の子等が垣本に、植ゑしはじかみ、くちひゞく、我は忘れじ、擊ちてしやまむ。

と歌ひ給へる御威勢の烈しき、御心の猛々しき、「韮、薑を食へば餘味



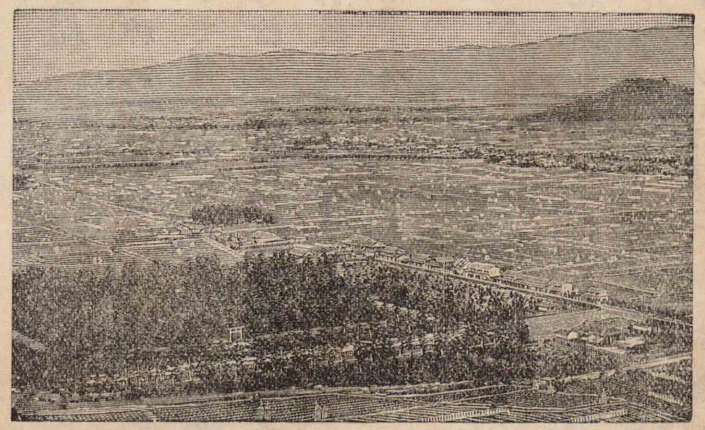
後醍醐天皇

ここに在りて、我が口ここに疼む。我が兄すでに擊たれぬ。我が心なほ痛む。忘れんや、忘れんや。おのれ醜虜、擊屠らでは、いかで止まん。」と、御目に觸れし韮、薑に御情を寄せ給ひて、御言葉のあやをなし出で給へる、いさぎよしなんど申すも畏き御歌なり。

いさぎよしなんど申すも畏し

建武中興の帝後醍醐天皇は、これは、また申すも畏けれど、英明に渡らせ給ひし御門なり。されど、その歌の御こゝろ御姿は、世の異なるが爲もあるべけれど、いたく神武天皇のとはさま異なり。

秋ごとのならひとおもひし露時雨



神武天皇陵

涙はふり落つ

吉野神宮

ことしは袖の上にぞありける

と詠じ給へる、

まだなれぬ板屋の

のきのむらしぐれ

音をきくにも濡るゝ袖かな

とあそばされたる、臣子の分としては、我が日の本の天皇のかゝる御詠ありしかと思へば、恐ながら御いたはしさに涙はふり落ち、かゝる御歌を御詠ありたるその世いと恨めしく口惜し。

うづもるゝ身をば

なげかずなべて世の

くもるぞつらきけさの初雪

の御歌は、大御心の深く廣き、おろかなる身にも大凡は推測り奉られて、これまた涙とゞめあへず。

身にかへて思ふとだにも知らせばや
たみのこゝろのをさめがたさを

の御歌は、聖意いと畏く、恐多き極みの御詠なり。

物思はで過ぎつるかたの年つきは
いかに寢し夜の夢にかあるらん

と懷舊の情を詠み給ひたる、吉野の行宮にていかなるをりにか、

あだに散る花をおもひの種として
この世にとめぬこゝろなりけり

と感慨し給ひたる、同じ行宮にて御風邪めしたる時、

露の身を草のまくらに置きながら
かぜにはよもと賴むはかなさ

この世にとめぬ心

扈從

と詠じ給へる、御扈從の人々打續き身まかりける時、

ことはん人さへ稀になりにけり
わが世の末のほどぞ知らるゝ

と御心細くものし給ひたる、同じ行宮にて

ふしわびぬ霜寒き夜の床はあれて
袖にはげしき山おろしのかぜ

と詠じ給へる、船上山にて名和長年に賜ひたる

忘れめやよるべも浪のあらいそを
みふねの上にとめしこゝろは

の御詠の如き、なべて一天萬乘の御歌とし思へば、臣子の分としては、涙なくしては拜誦しまゐらせ難し。

忘れめやよるべも浪のあらいそ

——調言——

三　國體の精華

穗積八束

我が日本固有の國體と國民道德との基礎は、祖先教に淵源す。祖先教とは祖先崇拜の大義を謂ふ。我が日本民族の固有の體制は血統團體たり。血統團體とは、民族がその同始祖を敬愛するによりて共存團體を成し、祖先の威力に服從するによりて平和の秩序を維持するを謂ふ。小にしては家を成し、大にしては國を成すものなり。祖先崇拜の大義は、血統團體を構成し維持するの原由たると同時に、血統團體の存續は、又祖先崇拜の大義を鞏固にし深遠にするの効果あり。二者相俟ちて消長し、須臾も離るべからず。而して我が固有の國民道德たる忠孝、友和、信愛の道は、一に皆祖先崇拜の大義に淵源し、血統團體を保持するの軌轍たり。我が堅固なる家國の體制は祖先教の基礎の上に立つ。これを千古に維ぎ、これを萬世に傳ふ

血統團體

軌轍

るは我が民族の特質にして、我が國體の精華とするところなり。

人は孤立獨存し得べきものにあらず。共同團結以てその生存を全うす。而してその團結する原由と形體とは固より一ならず。但し利害を以て集散し、約束を以て協和を維持するものはその團結固からず、又久しからず。利害の異同は生存の狀況に隨ひて時に變轉し、人爲の約束は又人爲を以て解除せらるゝを免れざればなり。血族相依るは自然の團結なり。兒孫が父母の保護の下に團欒するは社會の初にして、民族が同始祖の威靈の下に國を成すは天賦の團結たり。血脈相通ずるは天然の連鎖なり。人爲を以てこれを絶つことを得ず。利害の觀念の外に超越し、敬愛の至情に由り、離るべからざるの共同生存を成すものは血統團體なり。

血統はこれを祖先に受け、これを子孫に傳ふ。故にその團結は永久なり。血族關係は利害を以て離合繼續するを得ず。故にその團結

家長權

統治權

餘慶

は鞏固なり。而してこれを統一するものは祖先の威力なり。子孫の祖先の威力に服從するは、對等の約束ならざれば、敬愛の情厚く、忠順の念深し。家に在りては、家長は祖先の威靈を代表し、家族に對して家長權を行ひ、國にありては、天皇は天祖の威靈を代表し、國民に對して統治權を行ふ。家長權と統治權とは、ともに君父がその祖先の慈愛する子孫を祖先の威靈に代りて保護する權力なり。

吾人の今日あるは、吾人の祖先が血統團體を建設し、維持し、遺傳したるの餘慶なり。何が故に血統相近きもの相依りて家を成し、民族を成し、又國を成したるか。祖先を崇拜し、その威力と慈愛との下に生存の保護を全うせんと欲する天性の至情に外ならざるなり。汝の父母を敬愛し、その慈愛なる保護の權力に從順なる至情は、延いてこれをその父母の父母に及すべし。吾人の祖先の祖先は即ち畏くも我が天祖なり。天祖は國民の始祖にして、皇室は國民の宗家

絶對の理法

顯界

幽界

たり。父母拜すべし、況や一家の祖先をや。一家の祖先拜すべし、況や一國の始祖をや。家長の位は祖先の靈位にして、皇位は天祖の靈位なり。父母は現世に在る祖先たり。天皇は現世に在る天祖たり。父母に孝なるべき所以は、即ち皇室に忠なるべき所以にして、これを一貫するの國教は、即ち祖先の崇拜なり。この大義は吾人の祖先が國家を成したる基礎にして、吾人がこれを永遠に維持するの軌道たるものなり。

人は信仰によりて動作す。限定せられたる人智は、宇宙の現象を總合してこれをその根柢の眞理に歸結し、絶對の理法を自覺して行動すること能はざればなり。吾人の祖先は肉體の外に不死の靈魂あることを確信し、又子孫を慈愛する父母の威靈は、顯界に於てその肉體を喪ふも、なほ幽界に在りてその子孫を保護することを確信したり。これ祖先崇拜の大義の淵源にして、敬神の我が國教た

吾人は祖先の生命の繼續にして子孫は吾人の生命の延長なり

る所以なり。我が固有の國體、民俗、祖先の祭祀を重んずるより重きはなし。家は祖先の威靈の住む所、國は天祖の威靈の住む所にして、祖先の威靈は國家を防護す。吾人は祖先の生命の繼續にして、子孫は吾人の生命の延長なり。祖先の祭祀を不朽に絶たざるは、吾人の肉體に於て代表せらるゝ祖先の生存を永遠に傳へんと欲するなり。祖先と吾人と子孫とが國家の觀念に於て同化し、その繁榮にして永久なる存在を全うするの大義ここに存す。祖先の靈位を現世に代表する君父に忠孝なるは、祖先に忠孝なるなり。君父が臣子を愛護するは、祖先がその子孫を愛護するなり。夫婦の和、兄弟の友、民族の共愛、すべて皆我が同祖の祭祀を重んじ、これを永遠に傳へ、祖先の家國の鞏固にして永久なることを欲する祖先の遺志に適從する道ならざるはなし。我が祖先崇拜の大義は國民の確信に出で、不朽の國體はこれによりてその基礎を立て、國民の道德はこれに

よりて深厚を加ふ。萬世に亘りて、この國、この民を保持するものは、この國體の精華たる我が固有の祖先教の力なり。――愛國心――

日本民族論

〔自修文〕

白鳥庫吉[一]

黃色人と白皙人の競爭は、決して近年になつて始つたものではない。アジヤの舊い歷史を見ると、天山[二]、葱嶺[三]を境として、有史以前の邈焉たる時代に始り、近代に及んで居るのである。その大體の形勢をいふと、西洋史の近代に至るまでは、黃色人種の勢がなか〳〵盛であつて、次第にアジヤに於ける白皙人を壓倒して、或はこれを西方に驅逐したり、或はこれをその地に於て支配したりして、非常な威力を振つた。啻にアジヤに於ける白皙人に對して威力を振つたのみでなく、進んで現今のヨーロッパに居る白皙人をも侵擊し、ロシヤを支配したり、又現今のハンガリーなどに據つて、ヨーロッパの西はフランス、南はイタリーまでも侵入して居る。そしてその結果の今日まで傳はつて居るのは、歐洲

（一）文學博士。東京帝國大學教授。千葉縣の人。
白皙人　歐米人のこと。皙は白い意。
（二）支那新疆と露領トルキスタンの間にある一大山脈。
（三）天山山脈の一部。
邈焉　遠いさま。

の中央に於けるハンガリー人、(一)バルカン半島に於けるトルコ人等である。現今のハンガリー人は、もとはウラル(二)山脈の南方に居つたもの、トルコ人はもとは天山の近傍に居つたものであるが、それが次第に西方へ突進して、かく歐洲の天地に立脚地を有するに至つたのを見ても、いかに黃色人が一時その勢力を振つたかを證明するに餘りあるであらう。

然るに近世の初からして形勢は一轉して、黃色人の勢力は次第に衰へ始め、白皙人の方が非常に盛になつて、次第に黃色人を壓倒するといふ傾向になつて來たのである。今日アジヤ大陸に於ける南北の黃色人は、いづれも歐洲の强國に支配せられたり、掣肘せられたりして、完全な獨立を爲して居るものはない。世界大戰の起因であつたバルカン半島の問題は、歷史上いかなる事を意味するかといふに、白皙人が次第に勢力を得て、ヨーロッパに居る黃色人をヨーロッパから驅逐しようとする歷史上の自然の結果に外ならない。で、歐米の白皙人は、東洋人といへば一概に輕蔑して、何事に於ても自分等より劣等の者で、到底自分等と肩を並べることの出來ぬ人間と信ずるやうになつてしまつた。そこ

(一)Balkan.（巴爾幹）
(二)Ural.アジヤとヨーロッパの境に横たはる山脈。
立脚地　自己の地歩を占める所。
掣肘　他から牽制して行動の自由を妨げること。ひぢをひく意。

で我が國に對しても、日本人もやはり黃色人であるから、これ等は怖るべきものでないと從來は考へて居つた。然るにこの日本人が、前には日清戰爭、後には日露戰爭によつて武力を顯し、そして歐洲の文明を或程度まで採用し利用して、駸々乎として發展進歩して行く手並は、彼等の豫想を全く裏切つたのであつた。その反動として、今度はこれを怖れることも、妬むことも、亦實際に過ぎてしまつた。そこで先年から歐洲で唱へられた黃禍說などいふものも行はれるやうになつた。それ等の人は日本人を目して、これは嘗て中歐ハンガリーまで侵入した蒙古人(一)の如く、戰を好む國民であると速斷し、そしてこれを怖れ憎むことになつた。そこで動もすれば、日本人は蒙古人であるといふやうな理由を以て、政治上當然受くべき權利をも、妨害せられるやうな傾向になつて來た。然るに日本人はその事を聞いて驚いて、成るべく日本人を蒙古人でないやうにしようと考へ、日本人はヨーロッパ人に類した人種だとか、日本人はアジヤ人ではないといふやうなコジツケ說を吐くやうな傾がある。しかしながらこれは實際を顧ない不見識な議論である。我々日本人は黃色人であつて、白皙人でな

駸々乎　すみやかな貌。駸は馬の疾く走る有樣をいふ語。
豫想を裏切る　豫想に全く反する。
黃禍說　黃色人種の跋扈が歐洲人に及ぼす禍の義。
目す　さす。
(一)支那本部の北、滿洲の西、シベリヤの南なる蒙古に住む民族。

曲辯　正しくない議論で辯護すること。

(一)Mongoloid.

(二)元の太祖。

(三)Annam.　印度支那東部の王國。佛國の保護を受けて居る。

(四)Siam.　アジヤ東南部の一王國。

いことは、火を睹るよりも明らかな事實である。何を苦しんでアジヤ人に非ず、黄色人に非ずなどと曲辯するか、實に不見識千萬な話である。

我々日本人はいはゆる黄色人で、今日の人種學者、言語學者のいふモンゴロイドといふ言葉は、單に黄色い顏色をして居る人種に假に名づけたもので、我我日本人がモンゴロイドであるといふそのモンゴロイドは、いにしへ、勇武を以て鳴つた成吉思汗の蒙古人といふのとは、その意味を異にするのである。我々日本人は、黄色い顏をして居る人種を總稱したモンゴロイドの中には屬するけれども、成吉思汗を出した蒙古人とは同一でないのである。學術上の廣い意味の蒙古人と、成吉思汗の蒙古人を混同するところから、歐米人は無暗にこれを怖れたり、又日本人は不見識にもこれを辯解したりするのである。

日本人はモンゴロイドではあるが、成吉思汗の蒙古人ではないというたが、然らば日本人は實際いかなる人種であるか、これは大いに研究して見なくてはならぬ問題である。一體この日本の人種については、その本源がわからない。南方に旅行した日本人は、安南であるとか、暹羅であるとか、アジヤの南方の

(一)Ural Altai.　西はウラル山脈から東はアルタイ山脈に至る間の諸民族。

(二)Tunguses.　中部シベリヤのエニセー河畔から太平洋に至る地方に分布する諸種族の總稱。

(三)Magyars.

黄色人に、容貌上、生活上類似することを認め、直ちに日本人は南方から來たと論斷するものがあり、それと同時に、朝鮮半島から滿洲蒙古に旅行するものは、又それ等の土地の人間が日本人に類似して居るところから、我々は北方の民族と同一だとの說を立てる。なるほど俗人がたゞ漫然と見たところでは、両方の人民に類似して居るので、各その說を異にするのであるが、結局いづれとも斷定は出來ぬ。しかし南北両方の人種のいづれにも似て居るといふのは實際であつて、予の見るところによれば、我が日本人種は、アジヤの南北の両人種の中間に位するもので、両人種の中間民族であると思ふ。それ故に北に旅行するものは北方民族といひ、南に旅行するものは南方民族といふのである。

一體アジヤの南北の黄色人種は、いかなる性質を有するかといふに、まづアジヤの北方に據つて居る民族、即ち今日の言語學者や人種學者のウラルアルタイ民族と稱へるものを見るに、この民族は、中には歴史上の舞臺に顏を出さないものもあるが、大概は歴史上に活動した。しかもその中最も有名なのはトルコ人、蒙古人、ツングース、マジャール即ちハンガリー人等である。それ等の

赫灼　ひかりかゞやくさま。

遊牧　居所を一定しないで、水草を逐うて牛羊などを牧養して歩くこと。

謬見　まちがつた見解。

(一)支那の國號。文王昌と武王發の建てた國。西暦前一一二二年から二五六年までの間。

中でも特に活動したのは、蒙古人とトルコ人で、その行動は赫灼として輝いて居る。然らば何を以て歴史上に有名になつたかといへば、これ等の民族は元來遊牧を業とし、殺伐で、勇武を以て四隣に鳴つたのである。即ち武力で他人種を掠めることがこの民族の古來の習慣であり、事業であつて、侵入掠奪がその國民性として固定した。近頃歐洲人が日本の勃興を視て黄禍説などを唱へるのは、いにしへトルコ人や成吉思汗の蒙古人が、盛に掠奪を行つたのを想起したので、蒙古人といへばアジヤ人全體を指すものと思つた謬見に基づくのである。

アジヤの南方にある黄色人の代表者は、いふまでもなく支那人である。この國民は太古から土着であつて、平和を好み、どこまでも文化文物を尊崇する人種である。この人種は北方人種と違つて戰爭は下手であるが、文化の點に於ては、すべての黄色人中、この民族の右に出る者はない。しかしこの民族も周時代から二千何百年間は、殆ど變らない。それは何故であるかといふに、始終北方民族から武力で侵害せられるので、自分の出來上つた風俗、習慣、文物等を固く守つて、社會組織が崩壞せられぬやうにしなければならぬ。それですべて

保守的　從來の狀態を保ち守ること。

中和　中正でおだやかなこと。

(一)古事記や日本書紀。

茫邈　とほくひろいさま。

が保守的にならざるを得なかつたのである。

さういふ譯で、アジヤの北の民族は武に偏し、南の民族は文に偏し、いづれも武と文に固つて、保守的の民族となつてしまつたのであるが、獨り我が日本民族のみはこの両民族の中間に位し、又地理、風土の上に於て中和を得、且大陸から離れて獨立を全うし得たが爲に、その發展進歩の上に於て、大陸の両民族とはまるで違つた徑路を取ることが出來たのである。

元來我が日本民族は大陸から渡つて來たものに相違ないが、アジヤの南北の両人種が、この島に渡つて混和するに至つたのは、一般の學者の信じて居るところよりもずつと〳〵古い事で、神典(一)などに書起されてある年代よりも、遙かに前の事と思ふ。それでその本源はしかとはわからないけれど、有史以前の茫邈たる太古に屬する事で、その頃の日本人は、ごく開けない民族であつたと想像せられる。ここにこれを詳しくいふことを避けるが、例へば、數の數方などは極めて原始的なやり方で、日本人は片手で以て減法を行ふことを知らず、両手で以て加算しか出來なかつた人種であつた。三と六、四と八などいふ倍數の

言葉が、皆同一列にあることなどがこれを證明する。この原始の日本民族は、極めて幼稚なものではあつたけれど、しかしながらなか〳〵發達する能力、非常な發展力をもつた民族であつた。それでこの民族は他の國と接觸すると、いつでもその長所を採用して、自己の發展に資することを得た。即ち初には朝鮮の文化を採用し、ついで支那の文化を採用し、又支那を通じて印度の文化をも採用した。さうして西歐との交際が開ければ、盛に西歐の文化を採用する。外國の文化に同化せられることと日本人より甚だしいものは、世界に殆どその例を見ない。それで今日に於て、日本固有の古い風俗がどうであつたかといふことは、これを求めることがむづかしい。古來の朝廷の儀式に用ひられた衣冠、束帶は、日本固有のものかといふに、これは支那のものである。今日の禮服は西洋のと同じものである。外國の長を採つて我が短を補ふといふのが日本の國是であり、日本人の國民性である。日本がよく外國に同化し、又時代に應じて變化することが出來て、固定保守に陷らぬことの出來たのが、今日の日本のある所以である。それで日本民族は外國の文化に趣味をもち、自分より優れたものが

衣冠束帶　平安時代の貴族の禮裝。束帶は正式の服裝。衣冠は稍略式で、袍を着て指貫いとふものをはく。

國是　一國こぞつて是と認めた國家の施設方針。

あれば、直ちにこれを採らうとする。隨つて極めて平和を好む人種である。これは日本の寶典とする神典を研究してもよくわかることで、我が皇室が慈愛を本源とし平和を主義とせられることは一點の疑もない。(一)高天原を以て慈愛の本源としてこれを尊び、その反對なる黄泉の國を以て殺伐の本據としてこれを卑しんで居るのを見ても、これが證明せられる。即ち大體からいふと、我が國民性は文を重んじて武を輕んじたものといふことも出來る。この點は大いにアジヤの南方民族の代表者たる支那人に似て居る。けれども日本人が一朝自分の道德心に訴へて、正義に背いた赦すべからざる行爲と認めたり、又は一身、一家、一國の爲に止むを得ぬと認めた場合には、非常に勇猛な氣象を發揮する。外國と戰爭などする場合に當つては、平常の平和を好む性質が一變して、成吉思汗の蒙古人の如く猛烈になることは、古來の歴史、近くは日清、日露の両役を見てもわかる。これだけを見れば、全くいにしへのトルコ人や蒙古人に劣らぬ。それで黄禍説なども起るのであらう。けれども武が日本人の本領と思ふのは全く誤解、根本的謬見である。平和を好み文化を愛するのは日本人の本態であつ

(一)我が國天孫種族の祖國。本據　もとづき起るところ。

約言 つゞめていふ。

て、干を執り戈を揮ふのは日本人の變態である。約言すれば、日本人はアジヤの南方民族の文化を主とし、これに加へるに北方民族の勇武を以てし、南北両民族の長所を調和したのである。

四 東洋の詩興

夏目漱石

山路を登りながらかう考へた。

智に動けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高ずると心安い所へ引越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生まれ、畫が出來る。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人といふ天職が出來、ここに畫家といふ使命が降る。あらゆる

藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊にするが故に貴い。

住みにくい世から住みにくい煩を引抜いて、有難い世界をまのあたりに寫すのが詩である。畫である。或は音樂、彫刻である。細かにいへば、寫さないでもたゞまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さずとも、鏗鏘の音は胸裏に起り、丹青を畫架に向かつて塗抹せずとも、五彩の絢爛は自ら目に映る。たゞおのが住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清く麗かに收め得れば足りる。この故に無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なくとも、かく人生を觀じ得る點に於て、かく煩惱を解脱し得る點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩し得る點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

忽ち足下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いて

鏗鏘の音

(Camera) 澆季

ゐるか影も形も見えぬ。たゞ聲だけが明らかに聞える。せつせとせはしなく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されてゐたたまらないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を鳴きつくし、鳴きあかし、又鳴きくらさなければ氣が濟まぬと見える。その上どこまでも登つて行く。いつまでも登つて行く。雲雀はきつと雲の上で死ぬに相違ない。登り詰めた擧句は、流れて雲に入つて漂うてゐる中に、形は消えてなくなつて、たゞ聲だけが空の裡に殘るのかも知れない。

春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて、正體がなくなる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に眼がさめる。雲雀の聲を聞いた時に魂の在所が判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲に現れたものの中で、あれほど元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つてかう愉快になるのが詩である。

忽ち(一)シェリーの(二)雲雀の詩を思ひ出して、口の中で覺えた所だけ諳誦して見たが、覺えてゐる所は二三句しかなかつた。

夏目漱石筆蹟

前を見ては、しりへを見ては、物欲しとあこがるゝかな、われ。腹からの笑といへど、苦みのそこにあるべし。うつくしき極みの歌に、悲しさの極みの想籠るとぞ知る。

なる程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて、前後を忘却して、一心不亂に我が喜を歌ふわけには行くまい。

西洋の詩は無論のこと、支那の詩にもよく萬斛の愁などといふ辭がある。詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く積

(一) Percy Byysshe Shelley. イギリスの詩人。(西暦一七九二年—一八二二年)

(二) 雲雀に寄する賦。(Ode to the Skylark.)

何食はぬ和尚の顔やふくと汁　漱石

萬斛の愁

醇乎として醇

になれば、微塵の苦みもない。菜の花を見てもたゞうれしくて胸が躍るばかりだ。かく山の中へ來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦みも起らぬ。

苦みのないのは何故であらう。たゞこの景物を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面をもらつて開拓する氣にもならねば、鐵道を架けて一儲する料簡も起らぬ。たゞこの腹の足しにもならぬ景色が、景色としてのみ余が心を樂しませるから、苦勞も心配も伴なはぬのであらう。自然の力はここに於てか尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩興に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、泣いたりするのは、人の世のつきものだ。余の欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、少時でも塵界を離れた心持になれる詩である。

(一)晉の詩人陶淵明の詩。
(二)唐の詩人王維の詩。
別乾坤

いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小說は少からう。ごこまでも世間を出ることの出來ぬのがその特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、いはゆる詩歌の純粹なものも、この境を解脫することを知らぬ。うれしいことに、東洋の詩歌には、そこを解脫したものがある。

採(一)菊東籬下。　悠然見南山。

たゞこれぎりのうちに、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出て來る。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。

獨坐(二)幽篁裏。　彈琴復長嘯。
深林人不知。　明月來相照。

たゞ二十字の中に、優に別乾坤を建立してゐるのである。

——草枕——

征驂 遠ク行ク車馬
平蕪ヲ輦ク
覇圖

五　萬里の長城

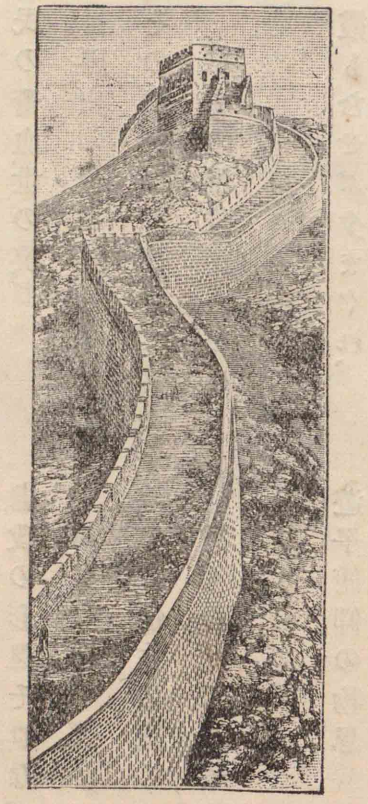
土井晩翠

生ける歴史か、數ふれば
齢は高し二千年、
影は萬里の空遠き
名も長城の壁の上。
落日低く、雲淡く、
關山看すゝ暮れんとす。
征驂悵みとゞまりて、
俯仰の遊子身はひとり。
絶域花は希ながら、
平蕪の綠今深し。
春乾坤に回りては、
霞まぬ空もなかりけり。
天地の色は老いずして、
人間の世は移ろふを、
歌ふか、高く大空に、
姿は見えぬ夕雲雀。
嗚呼、跡ふりぬ。人去りぬ。
歲は流れぬ。千歲の
昔に返り何の地か、
かれ秦皇の覇圖を見ん。
殘壘破壁聲もなし。
恨も暗し、夕まぐれ、

メ　合図ノ為ニ烟ヲ打上ゲタルモノ
狼火（狼烟）ハ飛火

春朦朧のたゞ中に、
俯仰の遊子身はひとり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊


萬里の長城

邦は亡びて邦に次ぎ、
人は代りて人を追ふ。
鼎は移る朝二十。
歲は流るゝ曆二千。
中華幾たび烽擧り、
長城の壁越えきたり、
又越えさりし國民の
數さへいかに世々の跡。

山川影はかはらねど、
群雄の覇圖いたづらに、
獨り邊土の影絶えず、
殘壘苔に今青む
民の膏血、世の笑、
歴史の色に染められし
その面影に忍びでて、
暮春の恨誰がために、

霞もむせぶ夕まぐれ、
北夷禦ぎし長城の
時世空しく流れては、
秦、漢、魏、晉移り行く、

春夢空しく跡もなし。
殘すは獨り史上の名。
齡重ねて二千歳。
長城の影たふとしや。
虐政の形見それながら、
萬里の影ぞ懷かしき。
泣くは懷古の露のみか。
霞もむせぶ夕まぐれ。

遊子俯仰の物思、
昔の跡はかはらねど、
中華の姿あすいかに。
昔の跡に引換へて、

西の嵐の吹寄する
西暦一千九百年、
中華の光、先王の
愛を四海に傳ふべき
看ずや豺狼の慾飽かで、
群羊守る力なく、
俯仰古今の物思、
征驂悵みいなゝける
思も遠く眺むれば、
自然の樂も絶果てつ。
恨を含む長城の

黄海の波今あらし。
東亞の嵐あすいかに。
道この民を救ひ得じ。
神人の教いま空語。
キリスト教徒血を啜り、
異教の民の聲呑むを。
遊子の恨いつ盡きん。
響をかへす壁のもと。
霞たゞよふ大空の
關山暮れて星出でて、
姿は闇に呑まれ行く。

——曉鐘——

六　山の日本

河東碧梧桐

直徑百六十三尺の大地球儀を作つて、これに富士山を印すると、その高さは僅かに一寸に滿たないと地球儀製作者はいつてゐる。が、それはたゞ地球の大いさを測定する計算であつて、山嶽の崛起するところに存する默示、それを解釋する人類の生きた思想は、炳乎としてその歷史の大部分を飾つてゐる。必ずしも朝暉晩曛といはず、また飛雪疾雲といはず、春山に笑ふといひ、冬山に眠るといふ四時折々の變化は、やがて宇宙大秘密の片鱗の閃くもの。それを驚異し、それを讃歎し、或はその崇高に打たれ、その雄偉を頌するもの、詩に「節彼南山維石巖々。」といひ、易に「天下有山。遜君子以遠小人。」といひ、禮に「名山大川不以封。」といひ、論語に「仁者樂山。」といひ、李太白は「一生好入名山遊。」といひ、ラスキン(一)は「山は人類の爲に作られたる學堂にしてまた寺院なり。」といふ。

默示
朝暉晩曛

(一) John Ruskin. イギリスの哲學者兼美術批評家。(西暦一八一九年―一九〇〇年)

我が邦の平原を以て目すべきもの、まづ指を北海道十勝の曠野に屈せねばならぬ。次いでは石狩の平野、內地に入つて僅かに武藏野、越後平、尾濃に亘る低地を算すべきである。會津、米澤、南部の如き、平の名はあるとしても、いづれは擂鉢の底。佐賀、柳川を抱擁する筑後川流域に沿ふ肥筑の沃野があつて

阿蘇の噴火口

も、それは佐渡が島に於ける大佐渡、小佐渡間の國中平に彷彿たるものに過ぎぬ。まことや我が邦の平地は、全面積の九分の一に過ぎぬといふ。その他の九分の八は即ち丘陵山嶽を以て埋められてゐるのである。いはゆる九牛の一毛、毛の字の殊に適切なるを覺える

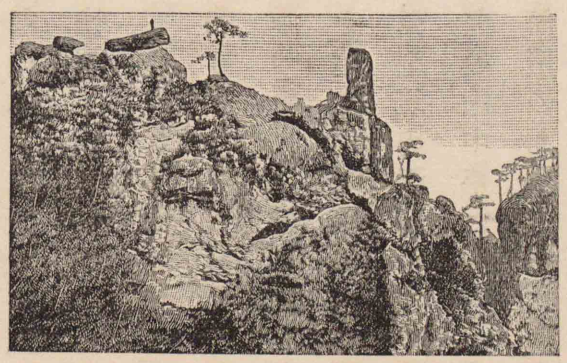
九牛の一毛

のである。

地形上「山の日本」といふその「山の」の冠詞は、一方面の性質を形容する詞ではなくて、直ちにその全體を意味するものである。眞に「山の日本」は、その商品に缺けるところのない完全なデパ(一)ートメント・ストーアである。

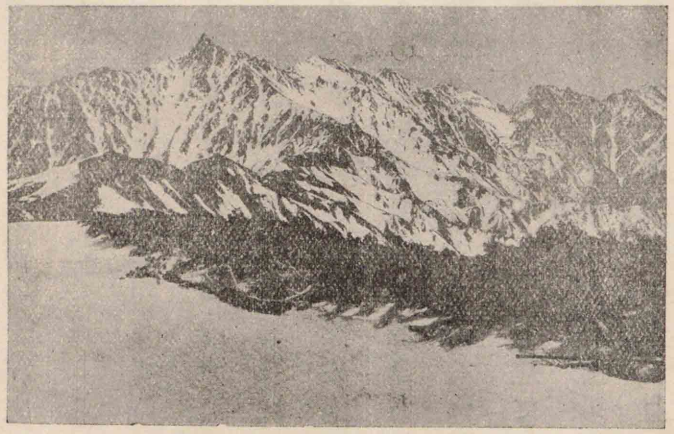
Department store.

漢字に山といひ、嶽(岳)といひ、峰といひ、巒といひ、岑といひ、陵といひ、阜といひ、丘といふ、操觚字訣の說明よりも、到る所あり餘る實例は、更に的確な證明を與へてゐる。試に眸を四方に放つて見よ。山頂四季烟を吐き火を噴く阿蘇、淺間の如き活火山、完全な圓錐形狀をなす富士形の息火山、その火山を廻る外輪の連山と、その火山に隷屬



妙義山

する寄生火山、山巓數峰に裂けて巍峨相鬩ぐが如き甲州の八ヶ嶽、陸奥の八甲田山の如き、何處を山頂とも知らず矗々奇岩の並立する妙義、庚申山の如き、孤峰の尖錐突兀たる槍ヶ嶽の如き、臥牛の如く平崗な比叡、伊吹の如き、たゞ六曲の屏風を塀立した戸隱の如き、その他枚擧にいとまないが、等しく山といひ嶽といふにも、その形狀の千狀萬態なるに驚かぬものは幾人あらう。岡阜丘陵も亦砂丘なるもの、赭禿なるもの、斷層のあらはなるもの、俎板に似たもの、鞍に似たもの、兜に似たもの等、千差萬別、一々名狀すべからざるものがある。これを造化



槍ヶ嶽

皺襞

の妙を盡し奇を玩ぶあらゆる技巧の行止りと見ることは出來ぬであらうか。宇宙の一秘庫を發いて、一々相等しからざるその標本を羅列するものと見ることは出來ぬであらうか。

地文學者は說明していふ、「往古地殼の冷却凝縮するに隨つて地上所々に皺襞を生じた。その皺襞がやがて今日の山嶽となつた。それを古生紀山脈とし、後、地中の强熱外界に噴出して各所に岩石土砂を堆積した。これが火山質山脈である。日本の古生紀山脈はほゞその地形と同じく、西南九州より東北北海道に至るまで弓形狀に連亘してゐる。さうして火山質山脈も、亦その古生紀山脈に沿うて噴起してゐるものと見て大差はない。いはば親讓の身代に、自己蓄積の財產を附加へたやうなものである。山としての財產は眞に申分のない出來榮である。且それ等「原成山嶽」も、雨露霜雪の浸潤のために次第にその原形を消磨しつゝあり、すでに普通消磨する部分

起伏重疊

は大方消磨し盡した「後成山嶽」もある。即ち山嶽の形狀千狀萬態なる所以である。

けれども若し單に趣味的にいへば、遠望に佳なるのがあり、近景に可なるのがあり、海洋を配し湖沼を添へてよいのがあり、麓に長蛇の森林を彩つて見るべきものがあり、起伏重疊たる丘阜を從者に伴なはなければならぬのがあり、相對立して情を添へるのがあり、孤峰截然として奇なるのがあり、坦々たる高原と相俟つのがあり、土層斑々たる斷層と調和を保つのがあり、登つて頂上の眺望を專らとするのがあり、登攀の途奇景送迎するのがあり、瀧、雪、河瀨、雨脚を賞するのがあり、竹、木、花、紅葉、若葉の缺くべからざるのがあり、その類擧げて數へることが出來ない。山嶽の觀賞また容易の業にあらざるを知るのである。

——日本の山水——

七　富嶽の詩神を懷ふ

北村透谷

空を望んで駿驅する日陽、虚に循つて警立する候節、天地の運流いつを以て極みとはするならん。

朝に平氏あり、夕に源氏あり、飄忽として去り、飄忽として來る。一潮山を嚙んで一世紀沒し、一潮退き盡きて他世紀來る。歴史の載するところ一潮ごとに葉數を減じ、古苔むし盡して英雄の遺魄日に寒し。嗚呼、人生の短期なる、きのふの紅顏けふの白頭。忙々促々として眼前の事に營々たるもの、悠々綽々として千載の事を慮るもの、同じくこれ大暮の同寐。霜は香菊を厭はず、風は幽蘭を容さず。忽ち逝き忽ち消え、邈冥として踪ぬべからざるを致す。

墳墓何の權かある。宇内を睥睨し、日月を叱咤せし英雄何すれぞ墳墓の前に弱兎の如くなる。誰か不朽といふ字を字書の中に置き

飄忽
忙々促々、こせくせくとして
あくせくきつとりする
遺魄
思いはかて
寒さのために枯ちはてる
霜は香しい菊の上たから
といって
この上に置いて枯らすことも
遠慮した
ゆかしい香
とる色を持つ
菊花
吹き散らす
ずに置かなの
叱咤す
とうへ所がを
ききま

て、而して世の俗眼者流をして縱に流用せしめたる。嗚呼、墳墓汝の冷々たる舌、汝の常に餓ゑたる口、何者をか嚙まざらん、何物をか呑まざらん。而して墳墓よ、汝も亦遂に空々漠々たり。水流滔々として洋海に趣けども、洋海は終に溢れて大地を包まず。冉々として行暮する人世、終に新なるを知らず、又故なるを知らず。

朽ちざるものいづくにかある。死せざるものいづくにかある。われ答を待ちて躊躇せり。而して答終に來らず。朽ちざるに近きものいづくにかある。死せざるに近きものいづくにかある。われこの答を聽かんが爲に、過去の半生を逍遙默思に費せり。而して終にその一部を聽けりと思ふは非か、非ならざるか。

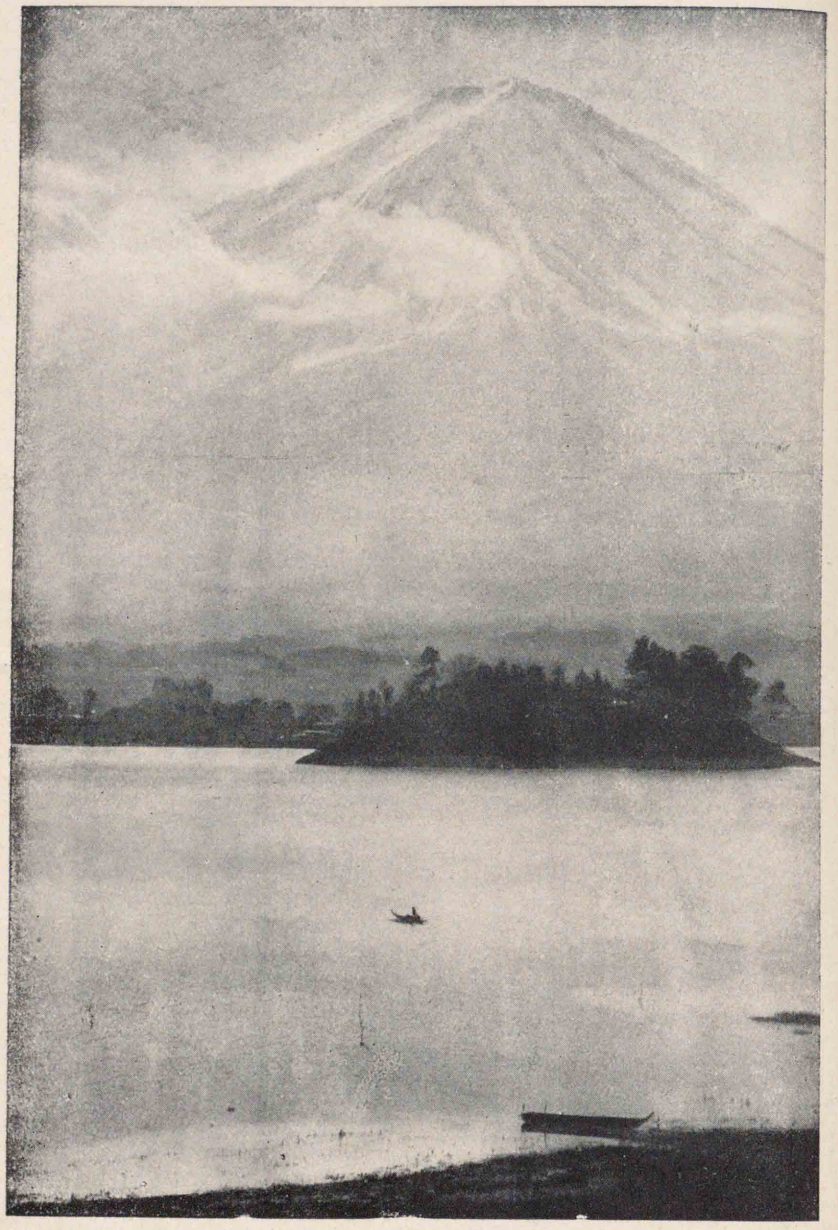
天地のわかれし時ゆ神さびて、高く貴き駿河なる富士の高嶺を、天の原振りさけ見れば、渡る日の影も隱ろひ、照る月の光も見えず、白雲もいゆき憚り、時じくぞ雪は降りける。語り

俗眼者流

繼ぎいひ繼ぎ行かん富士の高嶺は。（山部赤人）

「白雲、黑雲、積雪、潰雪、閃電、猛雷、これ等のものを用役し、これ等のものを使僕し、これ等のものを制御して、而して恒久不變の威靈を保つもの、富嶽よそれ汝か。渡る日の影もかくろひ、照る月の光も見えず、晝は晝の威を示し、夜は夜の威を示す。富嶽よ、汝こそ不朽不死に邇きものか。汝が山上の浮雲より早く消え、汝が山腹の電影よりも速に滅する浮世の英雄何の戲ぞ。勇ましや汝の山麓を西に馳する風。快や汝の山嶺を東に飛ぶ風。流轉の風汝に迫らず、無常の權汝を襲はず。自由汝とともにあり。國家汝とともに樹てり。何をか畏とせん。」

遠く望めば美人の如し。近く眺むれば威嚴ある男子なり。アルプス山の大歐文學に於ける、わが富嶽の大和民族の文學に於ける、淵源するところ、關聯するところ、豈寡しとせんや。遠く望んで美人の



富士山

如く、近く眺めて男子の如きは、そもわが文學史の證するところの姿に非ずや。アルプスの崇嚴或はこれを缺かん。然れども富嶽の優美何ぞ大いに讓るところあらん。われはこの觀念を以てわが文學を愛す。富嶽を以て女性の山とせば、わが文學も恐らく女性文學なるべし。雪の衣を被ぎ、白雪の頭巾を冠りたる恒久の佳人、われはその玉容を樂しむ。

盡きず朽ちざる詩神、風に乘り雲に御して東西を飄遊し給へり。富嶽駿河の國に崛起せしといふ朝、彼は幾億萬里の天涯よりその山巔に急げり。而して富嶽の威容を愛するが故に、その殿居に駐りて棲みて、遂に復去らず。これより風流の道大いに開け、人麿、赤人より降つて、西行、芭蕉の徒、この詩神と逍遙せんが爲に、富嶽の周邊を往返して、形なく像なき記念碑を空中に構設し始めたり。詩神去らず、この國尙愛すべし。詩神去らず、人間尙味はひあり。——透谷全集——

飄遊す

シテ　天人
ワキ　白龍
ワキツレ　漁夫

(一)「風早の三保の浦曲を漕ぐ舟の、浦人さわぐ涙立つらしも。」（萬葉集）

(二)詩人玉屑に「千里好山雲乍斂。一樓明月雨初晴。」

時しもや　心空なる景色

(三)「忘れずよ清見が關の涙間より、かすみて見えし三保の松原。」（續古今集、中務卿親王）

八羽衣

ワキ一聲「風早の三保の浦曲を漕ぐ舟の、浦人騒ぐ涙路かな。」

羽衣

風早の三保の浦曲を漕ぐ舟の。浦人騒ぐ。涙路かな。これの三保の松原。白龍と申す。漁夫にて候。忽ちに起り。一樓の明月に雨初めて晴れたり。げに長閑なる時しもや。春のけしき。霞。月も殊なりの天の原。及びなき身の眺めも。心空なる景色かな。

謡

ワキサシ謡「これは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。

ワキツレ謡「萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨初めて晴れたり。げに長閑なる時しもや、春のけしき松原の、涙立續く朝霞、月ものこりの天の原、及びなき身の眺にも、心空なる景色かな。

歌「忘れめや、山路

(一)「風むかふ雲のうき涙たつと見て、釣せぬ先にかへる舟人。」（冷泉爲相の歌）

虛空

色香妙にして

奇特

をわけて清見潟、遙かに三保の松原に、たちつれいざや通はん。(一)風むかふ、雲のうき涙たつと見て、釣せで人や歸るらん。待てしばし、春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。涙は音なき朝なぎに、釣人多き小舟かな。

ワキ詞「われ三保の松原にあがり、浦の景色をながむるところに、虛空に花ふり、音樂聞え、靈香四方に薫ず。これたゞごとと思はぬところに、これなる松に、美しき衣かゝれり。より て見れば色香妙にして、常の衣にあらず。いかさまとりて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存候。

シテ詞「なう、その衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。

ワキ詞「これは拾ひたる衣にて候ほどに、とりて歸り候よ。

シテ詞「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物に非ず。元の如くにおき給へ。

ワキ詞「そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかやさもあらば、末世の奇特に留めおき、國の寶となすべきなり。衣を返す

さりとては

とやあらんかくやあらんせんかたもなみだ

(一)丹後風土記の歌。

事あるまじ。シテ詞「悲しやな、羽衣なくては飛行のみちも絶え、天上に還らんこともかなふまじ。さりとては返したび給へ。ワキ謠「この御詞を聞くよりも、いよ〳〵白龍力を得、詞「もとよりこの身は心なき、天の羽衣取隠し、謠「かなふまじとて立ちのけば、シテ謠「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。ワキ謠「地にまた住めば下界なり。シテ謠「とやあらん、かくやあらんと悲しめど、ワキ謠「白龍衣を返さねば、シテ謠「力及ばず、ワキ謠「せんか、たも、地謠「涙の露の玉鬘、かざしの花もしを〳〵と、天人の五衰も、目の前に見えて、あさましや。

シテ謠「天の原(一)、ふりさけみれば霞立つ、雲路まどひてゆくへ知らずも。地謠「棲みなれし、空にいつしかゆく雲の、羨ましき景色かな。迦陵頻伽のなれ〳〵し、聲今更にわづかなる、雁が音の歸りゆく、天路をきけば懷かしや。千鳥、鷗の沖つ浪、行くか歸るか春風の、空に吹くまで懷かしや。

羽衣の舞

ワキ詞「いかに申候。御姿を見奉れば、餘りに御痛はしく候ほどに、衣を返し申さうずるにて候。シテ詞「あらうれしや。こなたへ賜はり候へ。ワキ詞「しばらく。承り及びたる天人の舞樂、たゞ今ここにて奏し給はば、衣を返し申すべし。シテ謠「うれしや、さては天上に還らんことを得たり。このよろこびにてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲ありたゞ今ここにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくてはかなふまじ。さりとては

疑は人間にあり天に僞なきものを

霓裳羽衣の曲

東遊

久かたのあめといつぱ

(一)伊弉諾、伊弉冊の二尊。

(二)東西南北乾坤巽艮上下。

玉斧の修理

(三)「春霞たなびきにけり久かたの、月の桂も花や咲くらん。」(後選集、紀貫之)

まづ返し給へ。ワキ詞「いや、この衣を返しなば、舞曲をなさでそのまに、天にやあがり給ふべき。シテ詞「いや、疑は人間にあり。天に僞なきものを。ワキ謠「あらはづかしや。さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ謠「少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ詞「天の羽衣風に和し、シテ謠「雨に濕ふ花の袖、ワキ詞「一曲をかなで、シテ謠「舞ふとかや。地謠「東遊の駿河舞、この時や始なるらん。

クリ地謠「それ久かたの天といつぱ、(一)二神出世のいにしへ、(二)十方世界を定めしに、空はかぎりもなければとて、久かたの空とは名附けたり。シテ、サシ謠「然るに月宮殿の有樣、玉斧の修理とこしなへにして、地謠「白衣、黑衣の天人の、數を三五にわかつて、一月夜々の天少女、奉仕を定め役をなす。シテ謠「我も數ある天少女、地謠「月のかつらの身をわけて、かりに東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。クセ「(三)春霞たなびきにけり久かたの、月の桂も花や咲くぱげに花かづら色めくは、春

(一)僧正遍昭の歌。

たぐひ浪も

玉垣

(二)「君が代は天の羽衣まれにきて、撫づともつきぬ巖なるらん。」(拾遺集、讀人不知)

撫づとも盡きぬ巖

蘇命路の山

滿願眞如

のしるしかや。面白や天ならで、ここも妙なり天津風、(一)雲の通路吹閉ぢよ。少女の姿しばしとゞまりて、この松原の春の色を三保が崎、月清見潟、富士の雪、いづれや春の曙。たぐひ浪も、松風も、長閑なる浦の有樣。その上、天地は、何を隔てん玉垣の、內外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や。シテ謠「(二)君が代は、天の羽衣稀にきて、地謠「撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲そへて數々の、笙、笛、琴、箜篌、孤雲の外に充ち滿ちて、落日の紅は蘇命路の山をうつして、綠は浪に浮島が、拂ふ嵐に花ふりて、げに雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる。シテ謠「南無歸命月天子、本地大勢至。地謠「東遊の舞の曲、シテ、ワキ謠「あるひは天つみ空の綠の衣、地「又は春立つ霞の衣、シテ「色香も妙なり少女の裳裾、地謠「左右左、さいう颯々の、花をかざしの天の羽袖、靡くも返すも舞の袖。キリ地謠「東遊の數々に、その名も月の宮人は、三五夜中の空に又、滿願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふら

し、國土にこれを施し給ふ。さるほどに時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲の、愛鷹山や富士の高嶺微になりて、天つみ空の霞に紛れて失せにけり。

――觀世流謠曲――

羽衣の傳說

〔自修文〕

駿州の三保の松原、空も水も一つ色に澄渡つて、遙かに見やる富士の高嶺の雪、近くは寄返る荒磯の波と、天地を青と白に染分けて居る。いづくよりともなく、一片の白雲のやうにひらりとここに下り立つたものがある。照る日に輝く薄衣を松が枝に掛けて、清い汀に浴したのは天つ少女である。白龍といふこのわたりの漁夫、この薄衣を松の上に見つけて携へて歸らうとする。それを取られては再び天に上ることかなはず、是非返し給へと歎けば、天人の舞樂を奏し給はば返し申すべしとここに奏づる霓裳羽衣の曲。天つ少女は羽衣を得て天上へ歸つて行くといふのが、謠曲「羽衣」の概要である。謠曲の文には佛語が加つて居て、その文を見るとお寺の欄間などに彫つてある天女を聯想するが、これは我が太古から傳はつた神話である。しかもそれが方々にあつたのである。

古い風土記(一)の今日に殘つて居る文から見ると、近江國と丹後國に同じやうな話がある。近江國伊香郡與胡郷伊香小江に、八人の天つ少女が白い鳥となつて、天から下つて江の南の津に浴した。伊香刀美といふ男、こは神に相違なからうと狙つてゐたが、竊に白犬をやつて一人の天女の羽衣を盜ませた。天女はその爲に天上に歸ることが出來ず、伊香刀美の妻となり、男女各二人の子を產んだ。

もう一つは丹後國丹波郡(二)三家西北の隅の方に、比治里といふ所がある。この比治山の頂に眞井といふ井があつたが、或時天女七人ここに來て浴した。わなさ老夫、わなさ老婆といふ老人夫婦がこれを見て、その一人の羽衣を取隱した。その天女はやむなく老夫婦の子となつて、十年ほど住んだが、その間に天女はよい酒を釀し、一杯飲めば萬病立ちどころに癒るといふので、老夫婦は忽ちに富榮えた。然るに恩知らずの老夫婦は、その後この天女を追出したので、天女は天に歸ることも出來ず、諸所を流浪したといふ話である。白鳥の下つた話は

(一)元明天皇の御代諸國に命じて上進せしめられた地方誌。

(二)今、中郡。

なほ常陸風土記にも見えて居て、その話に多少の相違はあるが、とにかくよほどひろく傳播した話らしく見える。謠曲の「羽衣」は、畢竟この美しい古傳說を基礎として作つたものである。

ところが面白いことには、これは決して日本固有のものではなく、世界中に弘く擴つて居る話である。西洋では白鳥即ちスワン(一)が最も美しい上品な鳥と考へられて居るが、天女がこの白鳥となつて浴して居る中、その羽を取られて歸れなくなるといふ同じ筋の話が澤山ある。よつて傳說學者はこれをスワン・メイドン(二)式の傳說と名づけて居る。所々國々によつて少しづゝ違ふが、大體の筋は變らぬのである。スエーデンでは若い獵師が、三つの白鳥が羽を棄てて水中に浴するのを見付けた。その中の一つの羽衣を隱して置くと(三)、他と一緒に歸れぬので、遂にその獵師の妻となつたといふ。ロシヤのミハイロ・イワノウィッチといふ男は、海邊を逍遙して、水中に浴して居る一羽の白鳥を見た。矢を以て射取らうとすると、やがて美しい女となつて現れた。白鳥ばかりでなく、外の鳥の話になつて居るのもある。極北に近いフィンランド(四)の話では、死んだ父親が

(一) Swan.
(二) Swan Maiden.
(三) Michailo Ivanovitch.
(四) Finland.

三人の息子の夢枕に立つて、夜海邊へ行つて雁を見よと告げる。二人は闇を恐れて行かなかつたが、末の子は夜中張番をして居る。明方に三羽の雁が來て、皆その羽を脫いで、美しい少女となつて海水に浴した。その中の最も美しい一人の羽衣を隱して渡さぬので、少女はその男の妻となつた。雁ではなくて家鴨と傳へられて居る所もあるが、又或地方では鳩になつて居るのもある。

地つゞきのアジヤ、ヨーロッパばかりでなく、南アメリカのギヤナ(一)にも同じ話がある。アラワックス(二)といふ土人の話に、或時一人の獵師が美しい鳥をつかまへた。これは天上に國を有する王樣アヌアニマ(三)の娘で、やがて人間の形になつて、その獵師と結婚したといふ。エスキモー(四)ではその鳥が海鳥になつて居る。又ポメラニヤ(五)の話に次のやうなのがある。獵夫が森の中をたどつて沼の脇へ出ると、一人の少女が沐浴して居るのを見た。多分近所の村からでも來たものと考へて、いたづらにその着物を隱した。少女は水から上つて、是非返してくれといふのを拒絕して、遂にその少女を妻とした。その着物は錠をおろして簞笥の中へ入れて置いたが、夫の不在中、妻はその姑に向かつて、是非その着物を

(一) Guiana.
(二) Arawax.
(三) Anuanima.
(四) Esquimau. (Eskimo)
(五) Pomerania.

見せてくれといふ。姑がそれを出して見せると、忽ちそれを持つて見えなくなつてしまつた。夫は歸宅して妻の行方を尋ねるとて、これから色々な冒險譚になるのである。或地方になると、鳥ではなくて獸になつて居るのもある。海豹が毛皮を脱いで浴して居る話もある。

白鳥が雁や、鳩や、色々な鳥になり、はては獸にまで變つて居るが、その道筋は全く同じである。これはその國の風土、動植物の差から起つて來るのである。謠曲の「羽衣」には鳥の事はないが、前に擧げた近江、丹後、常陸等の風土記の話も皆白い鳥である。天から少女が下つたといふ話には、天武天皇が吉野の瀧の宮にお出でになつて、たゞ一人琴を彈じていらせられると、雲の中で少女が袖を振つて踊つたのを御覽ぜられた事がある。これがそも〳〵五節の舞といふものの始であるが、つまりは同種類の話である。かういふ世界一般に擴つた話が太古からあるといふことは、面白いことではないか。

(一)昔十一月中の丑の日から新嘗祭の次の日の豐明節會にわたつて行はれた女樂。舞姫が五人、天女に擬し、五度袖をひるがへして舞ふ。

九　舟旅

紀貫之

(一)承平五年（一九五年）一月。前年十二月二十一日土佐國出發。

つとめて泊をおふ

一　別離

九日。つとめて、大湊より那波の泊をおはんとて漕出でけり。これかれ互に國の境のうちはとて、見送りに來る人あまたがなかに、藤原言實、橘季衡、長谷部行政等なん、御館より出で給ひし日より、ここかしこに追來る。この人々ぞ志ある人なりける。この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。これより今は漕ぎはなれて行く。これを見送らんとてぞ、この人どもは追來ける。かくて漕行くまに〳〵、海のほとりに留る人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にもいふことあるべし、舟にも思ふことあれどかひなし。かゝれどこの歌を獨言にしてやみぬ。

おもひやる心は海を渡れども
ふみしなければ知らずやあるらん

かくて宇多の松原をゆき過ぐ。その松の數いくそばく、幾千年へ

うれ
どち
べらなり

思へらず

たりと知らず。本ごとに浪打寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。面白しと見るに、たへずして、舟人のよめる歌、

見渡せば松のうれごとにすむ鶴は
ちよのどちとぞ思ふべらなる

とや。この歌は所を見るにえ勝らず。

かくあるを見つゝ漕行くまに〳〵、山も海もみな暮れ、夜ふけて、西東も見えずして、天氣のこと、檝取の心にまかせつ。男もならはぬはいとも心細し。まして女はふなぞこに頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。かく思へば舟子檝取はふなうた歌ひて、何とも思へらず。

二　海路

十六日。風浪やまねば、なほ同じ所にとまれり。たゞ海に浪なくして、いつしか深崎といふ所渡らんとのみなん思ふを、風浪ともに止むべくもあらず。或人のこの浪たつを見てよめる歌、

曉月夜

霜だにも置かぬかたぞといふなれど
なみの中にはゆきぞふりける

さて舟に乗りし日よりけふまでに、二十日あまり五日になりにけり。

紀貫之

十七日。曇れる雲なくなりて、曉月夜いとおもしろければ、舟を出して過行く。この間に雲の上も、海の底も、同じ如くになんありける。

うべも昔の男は、

(一)棹穿波底月。
舡壓水中天。」
(賈島)

棹はうがつ波の上の月を
舟はおそふ海の中の天を

とはいひけん、聞きさしに聞けるなり。或人のよめる、

水底の月の上より漕ぐふねの
さをにさはるは桂なるべし

これを聞きて或人の又よめる、

かげ見れば波の底なるひさかたの
空こぎわたる我ぞわびしき

かくいふ間に、夜やうやく明行くに、檝取等「黒き雲にはかに出で來ぬ。風も吹きぬべし。御舟かへしてん。」といひてかへる。この間に雨降りぬ。いとわびし。

三　都歸

十一日(一)。雨いさゝか降りて止みぬ。かくてさし上るに、東の方に山のよこほれるを見て人に問へば、八幡(二)の宮といふ。これを聞きて、人人拜み奉る。山崎の橋見ゆ。うれしきこと限りなし。ここに相應寺の邊に、しばし舟をとゞめて、とかく定むる事あり。この寺の岸の邊に

(一)二月十一日。
(二)よこほれる　男山八幡宮。
とかく定むる事あり

柳多くあり。或人この柳の影の川の底に映れるを見てよめる歌、

さゞれ浪よするあやをば青柳の
かげのいとして織るかとぞ見る

十六日。けふの夕つ方、京へのぼる序に見れば、山崎のたなる小檟の繪も、糰餅の法螺の形もかはらざりけり。賣る人の心をぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、來る時ぞ人はとかくありける。これにもそれにも、かへりごとす。

夜になして京には入らんと思へば、急ぎしもせぬほどに、月いでぬ。桂川月の明きにぞ渡る。人々のいはく、「この川飛鳥川(一)にもあらねば、淵瀬更に變らざりけり。」といひて、或人のよめる歌、

ひさかたの月におひたる桂川
そこなる影もかはらざりけり

あるじす

(一)「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる。」(古今集、讀人不知)

そでひづ

又或人のいへる、

天ぐものはるかなりつる桂川
そでをひでても渡りぬるかな

又或人よめる、

かつら川わがこゝろにも通はねど
おなじ深さにながるべらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて來れば、所所も見えず。京に入立ちてうれし。家にいたりて門に入るに、月あかければ、いとよく有樣見ゆ。聞きしよりもまさりて、いふがひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみて預れるなり。されば たよりごとに、物も絶えず得させたり。今宵かゝることと、聲高にものもいはせず、いとはつらく見ゆれど、志をばせんとす。

志はせん

さて池めいて、窪まり水つける所あり、ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千年や過ぎにけん、片枝はなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる。大方皆荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬ事なく思ひこひしきがうちに、この家にて生まれし女子も、もろともに歸らねば、いかがは悲しき。舟人も皆子抱きてのゝしる。かゝるうちになほ悲みに堪へずして、密に心知れる人といへりける歌、

うまれしもかへらぬものを我が宿に
小松のあるを見るが悲しさ

とぞいへる。なほあかずやあらん、又なん、

みし人を松のちとせに見ましかば
遠くかなしきわかれせましや

忘れ難く、口惜しき事多かれど、え盡さず。

——土佐日記——

一〇 東下り

昔男ありけり。その男身を益なきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方にすむべき國もとめんとて行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくも手なれば、橋を八つ渡せるによりてなん八橋とはいへる。その澤の邊の木蔭におり居て、飯くひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見て或人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて、旅の心を詠め。」といひければ、詠める、

唐衣きつゝ馴れにしつましあれば
はるゞゝ來ぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人、飯の上に涙落して、ほとびにけり。行きゝて

駿河の國にいたりぬ。宇津の山に至りて、我が入らんとする道は、いと暗う細きに、蔦、楓はしげり、物心細く、すゞろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かゝる道はいかでかいまする。」といふに、見れば見し人なりけり。京にその人の御許にとて、文かきてつく。

すゞろなるめ

駿河なるうつの山邊のうつゝにも
ゆめにも人に逢はぬなりけり

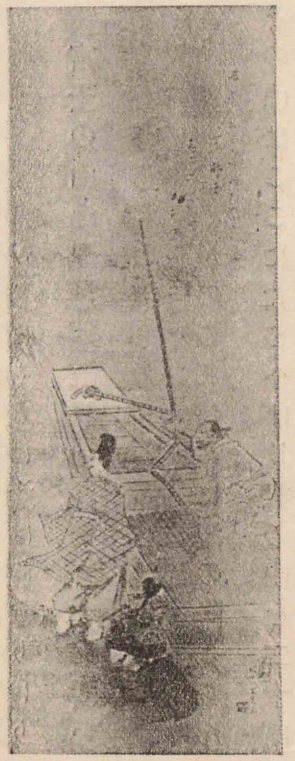
富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか
かのこまだらに雪の降るらん

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして、なりは鹽尻のやうになんありける。なほ行きゝて、武藏國と下總國のなかに、いと大きなる河あり、それを角田河といふ。その河の邊にむれゐて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかな

鹽尻

とわびあへるに、渡守「はや舟に乘れ。日も暮れなん。」といふに、乘りて渡らんとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と脚とあかき、鴫の大きさなる、水の上に遊びつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人え知らず。渡守に問ひければ、「これな



隅田川（菊池容齋筆）

ん都鳥。」といふを聞きて、

名にしおはばいざこと問はん都鳥
わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

——伊勢物語——

一一　千里が竹　その一

近松門左衛門

船路の末も知らぬ火の、筑紫は雲に埋めども、あとに應護の神風や、千波萬波を押切つて、時もたがへず親子の船、唐土の地に着きにけり。鄭芝龍一官は、故郷に歸る唐錦、裝束引きかへ妻子に向かひ、「我が本國といひながら、時遷り代變り、天下悉く李踏天が引入れにて、韃靼夷の奴となり、昔の朋友、一族とて、誰を尋ねんやうもなく、司馬將軍吳三桂が、生死の樣子も知れざれば、何を以て義兵の旗を擧げ、何所を一城に立籠るべき所もなし。然るに某去んぬる天啓五年、この國を立退き日本へ渡る時、二歳になりし娘の子を、乳母の袖に捨置きしが、その子の母は產落して當座に死す。かくいふ父は、八重の汐路の中絕えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の、雨露の惠に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して今吳將軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となれる由、商人の便に聞及ぶ。賴む方はこれ

(一)鄭芝龍とその子鄭成功。
(二)明朝の將軍。後、韃靼に內應して明帝を弑した。
(三)明朝の忠臣。司馬大將軍。
(四)明の熹宗の年號。（西曆一六二五年）
(五)錦祥女。
(六)明の將軍。韃靼に降つたが、幾千もなく鄭芝龍に應じた。

ばかり。親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、聟の甘輝も易々と賴まるべし。これより道の程百八十里、うち連れては人も怪しめん。われ一人道をかへ、和藤内は母を具し、日本の漁船の吹流されしと、頓智を以て人家に憩ひ、おつつくべし。これよりさきは、音に聞ゆる千里が竹とて、虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば潯陽の江、これ猛々の栖む所。風景聳えし高山は赤壁とて、昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城獅子が城へはほどもなし。その赤壁にて待揃へ、萬事を牒し合はすべし。」と、方角とても白雲の、日影を心おぼえにて、東西へこそわかれけれ。

教に任せ和藤内、人家を求め忍ばんと、かひ〳〵しく母を負ひ、たづきも知らぬ岩巖石、古木の根ざし瀧つ波、とび越え、跳越え、飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里絶えて廣々たる千里が竹に迷ひ入る。和藤内ほうと我をぬかし、「なう母じや人。この脛骨に覺

(一)支那江西省九江府。
(二)支那湖北省武昌府嘉魚縣。
(三)宋の詩人蘇東坡。

たづきも知らぬ

ほうと我をぬかし

えたり。もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふことか、行けば行くほど藪の中。むう、わかつたり。方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ、宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴。」と、根笹、大竹押分け踏分け、なほ奥深く行くさきに、怪しや數萬の人聲、攻鼓、攻太鼓、喇叭、ちやるめら高音をそらし、ひやう〳〵とこそ聞えけれ。「すは、我々を見咎めて、敵の取卷く攻太鼓か、又は狐のなすわざか。」と、茫然たるその折ふし、空凄じく風起り、砂を穿ちごうごうごう、竹葉さつと卷立て卷立て、吹折る竹は劒の如く、凄じなんどもおろかなり。

和藤内ちつとも臆せず、「讀めたり〳〵、さては異國の虎狩な。あの鐘、太鼓は勢子の者。ここは聞ゆる千里が原、虎嘯けば風起る、猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の楊香は、孝行の德に因つて、自然と逃れし惡虎の難。その孝行には劣るとも、忠義に勇むわが勇力、唐へ渡つ

讀めたり讀めたり

(一)「虎嘯而谷風至。龍舉而景雲屬。」淮南子。
(二)晉の人。十四歲の時赤手虎を搏して父の厄を救つた。

いがみ懸る

て力はじめ、神力ます〳〵日本力、及で向かふは大人氣なし。虎はおろか、象でも、鬼でも一挫ぎ。」と、尻ひつからげ身繕ひ、母を圍うて立つたるは、西天の獅子王も、畏れつべうぞ見えてける。

案に違はず吹く風と、ともに暴れたる猛虎のかたち、藤根に面をすりつけすりつけ、岩角に爪磨ぎたて、二人を目がけいがみ懸るを事ともせず、弓手に擲り、馬手に受け、捩つて懸れば身をかはし、撓めばひらりと乘移り、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力にえいえいえい、虎の怒り毛、怒り聲、山も崩るゝ如くなり。和藤内も大童、虎も半分毛をむしられ、両方ともに息つかれ、石上に突つたてば、虎も岩間に小首を投げ、大息ついたるその響、鞴吹くが如くなり。

母藪蔭より走り出で、「やあ〳〵和藤内、神國に生まれて、神より受けし身體髪膚、畜類に出合ひ、力立して怪我するな。日本の地は離るるとも、神は我が身にいすゞ川、大神宮の御祓、納受などかなからん

じり〳〵と

風來人

笑壺に入る

や。」と、肌の護符を渡さるれば、「げに尤も。」と押戴き、虎に差向け差上ぐれば、神國神秘のその不思議、猛りに猛る威勢も、忽ち尾を伏せ耳を垂れ、じり〳〵と四足をちゞめ、恐れわなゝき岩洞に匿れ入る、尾筒をつかんで跳返し、打伏せ打伏せ、ひるむところを乘つかゝり、足下にしつかとふまへしは、天の斑駒、素戔嗚尊の神力、天照らす神の威德ぞ有難き。

一二　千里が竹　その二

かゝるところに勢子の者、群り來るその中に、大將と思しき者大音擧げ、「やあ〳〵、うぬはいづくの風來人、我が高名を妨ぐる。その虎は忝くも、主君右將軍李踏天より、韃靼王へ獻上のため、狩出したる虎なるぞ。早々渡せ。異議に及ばば打殺さん。しやぐわん、しやぐわん。」とわめきけり。李踏天と聞くよりも、願ふところと笑壺に入り、「やあ、

ほざく

いつかなこと

餓鬼も人數、しをらしい事ほざいたり。身が生國は大日本、風來とは舌長し。さほど欲しがる虎ならば、主君と賴む李踏天とやら石花菜とやら、ここへ突出し詫言させい。ぢきに逢うて用もある。さもないうちはいつかなこと、ならぬ、ならぬ。」とねめつくる。「やあ、物ないはせそ、討取れ。」と、一度に劒をはらりと拔く。「心得たり。」と護符を虎の首にかけ、母の側に引据うれば、繫ぎし如くに働かず。「おゝ心安し。」と太刀さしかざし、群る中へ割つて入り、八方無盡に割立て割立て、撫でまくる。

勢子の大將安大人、官人引具し立歸り、「おのれ老耄餘さじ。」と、一文字に切りかゝる。なほも神明擁護の驗、神力虎に加つて、むつくと起きて身慄し、敵に向かひ齒を鳴らし、猛り唸りて飛びかゝる。「こはかなはじ。」と安大人、勢子の者が差いたる劒、かり鉾、數槍、手に當るを幸に、投附け投附け打ちかくる。虎は神力自在を得、劒を宙に引つくはへ引つくはへ、岩に打當て微塵になす。及の光、玉散る霰、氷を碎くに異ならず。打物盡くれば官人ども、色めき立つて逃惑ふ。後より和藤內、「どつこい遣らぬ。」と顯れ出て、安大人が素首をつかんで差上げ、くるくると振廻し、えいやつと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにけり。

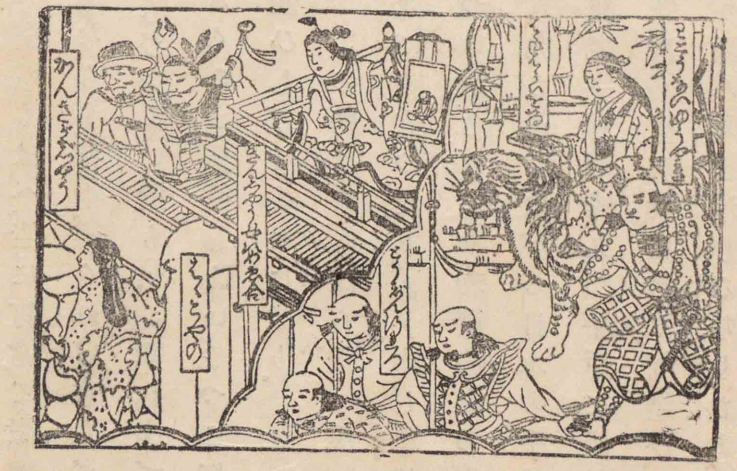
仁王立

この勢に官人ばら、後へ戻れば惡虎の口、先へ行けば和藤內、仁王立に突立つたり。「あゝ、申し御堪忍。御免々々。」と手を合はせ、土にくひつき泣きゐたり。和藤內虎の脊を撫で、「うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへこはがる日本の手並覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が悴、九州平戸に成長せし和藤內とは我が事なり。先帝の妹宮栴檀皇女にめぐり逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故郷へ立歸り、國の亂を治むるなり。さあ、命惜しくば身方につけ。否といへば虎の餌食。否か、應か。」とつめかくる。「なう、何の否で御座りませう。韃靼王

出かした

はらけ髪

に從ふも、李踏天に從ふも命が惜しさ。向後お前の御家來ども、お情頼み奉る。」と、地に鼻つけて畏まる。



姓爺合戰正本挿圖

「おゝ、出かした、出かした。さりながら、我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん。」と、指添の小刀はづさせ、これも當座の早剃刀、母も手に手に受取つて、並ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端剃るやらこぼつやら、絲鬢、厚鬢、剃刀次第、瞬く隙に剃りしまひ、二櫛半のはらけ髪、頭は日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顔を見合はせて、頭冷

つく風引いて、「くつさめ〳〵、村雨々々。」と、涙を流すぞ道理なる。親子どつと打笑ひ、「揃ひも揃うた供廻り、名も日本に改めて何左衛門、何兵衛、太郎、次郎、十郎まで、面々が國所頭字に名のり、二行に立つてぼつたてろ。」「承り候。」と、お先手の手振の衆、ちやぐちう左衛門、東蒲塞右衛門、呂宋兵衛、東京兵衛、暹羅太郎、白城次郎、ちやるなん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎、すん吉九郎、もうる左衛門、じやが太郎兵衛、さんとめ八郎、英吉利兵衛、今參のお供先、跡に引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の、名を取る、口取る、國を取る、譽は異國、本朝に、踏跨げたる鞍鐙、虎の脊中に打乘つて、威勢を千里に顯せり。

――國姓爺合戰――

(一)文學博士。東京帝國大學教授。福岡縣の人。

(二)近松門左衛門の號。

時代淨瑠璃　昔の傳說や歷史上の事柄などを基とした淨瑠璃。「國姓爺合戰」などがそれである。

教化上より見たる近松〔自修文〕

藤村作(一)

教化の目から見れば、巢林子(二)の時代淨瑠璃は、悉く武家精神の通俗宣傳たる

近松門左衛門

ものである。元祿時代は主從の上下關係と軍人たる職責の性質とを基礎として成立した武士精神と、個人の福利を營むを本務とした町人精神とが階級的に獨立して、未だその相互の浸潤感化を著しくしなかつた時代である。武士も武士らしい武士であれば、町人も町人らしい町人であつた時代である。

その後両階級の間に、両精神の浸潤感化が次第に行はれて來たのである。武士の町人化は、武士本位の時代であつたから、武士の墮落として、政治當局者や識者の憂となつたのであるが、町人の武士化は、それが階級制を壞すやうな事でない限り、多く問はれなかつた。のみならず、實際町人の德操品位を高めたものは、その感化であつたのである。この武士精神を町人間に宣傳して、町人の武士化を促した上に、近世のいはゆる通俗文藝の功の多いことは、固より言ふまでもあるまい。巢林子の如き、この方面に於ても、蓋しその尤なるものである。彼は新淨瑠璃の源頭に立つ人で、彼によつて淨瑠璃文學は大成せられて、爾後の作者は、一人として彼の直接間接の感化を受けてゐないものはない。極端にいへば、他は悉く模倣追隨者である。かうして彼によつて大成せられた

新淨瑠璃時代物の內容は、殆ど彼以來固定した有樣であるが、その中心たるものは、武士道精神に他ならぬ。時代の選方は、王朝時代であらうと、武家時代であらうと、又場所が我が國であらうと、外國であらうと、說話の根幹となつてゐる精神は、常に近世武士道精神である。

この精神を表現するに、彼は彼のいはゆる「慰み」を目的とした民衆的な藝術の衣裳を以てした。天皇であらうと、公卿であらうと、武士であらうと、町人的な性質の一部を持たしめることを必ず試みてゐる。彼のなした時代錯誤や、階級混同は、彼の無智無學から起つたのではなくして、彼の藝術上に意識した目的から來たことである。彼はこれくらゐの事を知るだけの知識は持つて居たに相違ないが、無智な民衆の娛樂を目的とした爲に、これを犯すことを辭しなかつたのであらう。このことを敎化上から考へて見れば、寧ろ彼の藝術の强みである。

藝術意識
藝術に對する見解。

功利的
自他の福利や快樂を標準とする。

彼の藝術意識が、馬琴などの如き儒敎風の功利的敎訓主義のそれでなかつた爲に、彼の藝術は馬琴物の如き、淺膚露骨な敎訓物に墮せずに濟んだ。そして

教訓物に墮しなかつたところが、教化上一層有效であつたに相違ない。眞の感化は期待しないところに多くある。文藝も教訓物よりは、却つて教訓物ならぬ物に多くの教化が期待せられることが多い。武士道精神を主内容として、通俗的で受容れ易く、美しい麗しい色と甘い味をつけられた娯樂的な藝術の形で創作せられ、作ごとに一代の人心を沸かしめたのであるから、その社會教化上の効果の少くなかつたことは、想像するに難くないのである。たゞ政治家の事業の如く、若しくは學者の著述の如く、その効果を計る尺度のない爲に、或は世人に看過せられ易いが、若しここにこれ等を平等に計量し得べき方法があるならば、彼の直接間接の社會教化上の業績は、なか〳〵偉大なものであらうと思ふ。

——(一)上方文學と江戸文學——

(一)藤村作の著書。

一三　儒の道をわらふ

一　論語

本居宣長

しきしまのやまと心を人とはゝ朝日にゝほふ山さくらはな

宣長

まなびの子

論語に「厩焚。子退朝曰。傷人乎。不問馬。」(一)これ甚だいかがなり。すべて人の家の焚けんにも、人はさしも燒かるゝものにあらず。馬はよく燒かるゝものなり。まして馬屋の燒けんには、人は危きことなし。馬こそいと危けれ。されば馬をこそ問ふべけれ。これ人情なり。然るにまづ人を問ふすらいかがなるに、馬を問はざるとはいと心なき人なり。但し人を問へるはさることなれば記しもすべきを、馬を問はぬが何のよきことかある。これまなびの子どもの、孔丘が常人に異なることを人に知らさんとする餘りに、かへりて

本居宣長とその筆蹟

(一)孔子。

孔子が不情をあらはせり。不問馬の三字を削りてよろし。

二　雪螢を集めて書讀みける唐土のふるごと

もろこしの國に、むかし孫康といひける人は、いたく學問を好みけるに、家貧しくして、油をえ買はざりければ、夜は雪の光にて書を讀みつ。又同じ國に車胤といひける人も、いたく書讀むことを好みけるを、これも同じやうにいと貧しくて、油をえ得ざりければ、夏の頃は、螢を多く集めてなん讀みける。この二つの故事は、いと〳〵名高くして、知らぬ人なく、歌にさへなん多く詠むことなりける。今思ふに、これ等も彼の國人の、例の名を貪りたる作り事にぞありける。その故は、若し油を得ずば、夜々は近どなりなどの家にものして、そのともし火の光を乞ひかりても、書は讀むべし。たとひそのあかり心にまかせず、はつ〳〵なりとも、雪螢にはこよなく勝りたるべし。又年の中に雪螢のあるはしばしのほどなるに、それがなきほどは、

ものす

はつ〳〵

夜は書讀まであり けるにや、いとをかし。

三　富貴を願はざるをよき事にする論

世々の儒者、身の貧しく賤しきを憂へず、富榮ゆるを願はず喜ばざるをよき事にすれども、こは人の眞の情に非ず。多くは名を貪る例の僞なり。希々にさる心ならん者ありとも、そは世の僻者にこそあれ、何のよき事ならん。理ならぬふるまひして、あながちに願はんこそは惡しからめ。ほど〳〵に勤むべき業をいそしく勤めて、なりのぼり、富榮えんこそ、父母にも祖先にも孝行ならめ。身衰へ家貧しからんは、上なき不孝にこそありけれ。たゞおのが潔き名を貪る餘りに、眞の孝を忘るゝも、亦もろこし人の常なりかし。

四　儒者の皇國の事をば知らずとてある事

儒者に皇國の事を問ふに、知らずといひて耻とせず。から國の事を問ふに、知らずといふをばいたく耻と思ひて、知らぬ事をも知顔

からめかす

にいひまぎらはす。こはよろづをからめかさんとする餘り、その身をも漢人めかして、皇國をばよその國のごともてなさんとするなるべし。されどなほから人にはあらず、御國人なるに、儒者とあらん者の、おのが國の事知らであるべきわざかは。但し皇國の人に對ひては、さあらんもから人めきてよかんめれど、若し漢國人の問ひたらんには、我はそなたの國の事はよく知れれども、我が國の事は知らずとは、さすがにえ言ひたらじをや。若しさもいひたらんには、己が國の事をだにえ知らぬ儒者の、いかでか人の國の事をば知るべきとて、かれ手を拍ちていたく笑ひつべし。

——玉がつま——

一四　國學

平田篤胤

學問は色々ある。その中に何の學問がいつち大きいぞといふに、ちと自分勝手のやうなれども、皇國即ち我が國の學問ほど、大きい

春秋命歷序考をかきなへてしりへに日本の神の授けしかからの道のいかでか開き得めやも日本人の開き初ける篤胤

物はないでござる。なぜといふに、まづ近く儒學と佛學との上で申さば、儒者は最初四書五經とか、十三經とかいふ類の書物を讀むことを覺え、又左國史漢といつて、左傳といふもの、國語といふもの、史記といふもの、漢書といふものなどをあら〳〵讀んで、さて漢文を綴る方を覺えたり、そのふだんの口ずさみに、詩を作ることでも覺えると、もう儒者といつて通られるが、何のこれしきの書物を讀んで、これしきの事を覺ゆるに、さして難いことは、ありや致さんでござる。大方世間の儒者は、皆このくらゐなものでござる。

平田篤胤筆蹟

さてその儒者に比べては、出家の方がよつぽど廣い。なぜといふに、己が是非讀まねばならぬと極めた俗にいふ經文が五千餘卷、馬

おもと

八紘九野
天漢

に付けたならば、七八駄あらう。それをみんな讀まず、十分の一を讀んだところが、ざつと儒者がおもと讀まねばならぬ書物の一倍もあるでござる。それのみならず、儒者は佛書を讀まんでも、事が缺けぬによつて、どんと讀まず。たまさか佛書を讀む儒者もあれど、そりや百人に一人もない。僧徒はそれと事かはり、儒者のおもと見る書物をば、子供の時から文字を知る爲に讀んで置く。又詩も漢文も儒者と同じやうに作りもする。そこで僧徒の學問は儒者よりは廣いでござる。

さて皇國の學問がいつち廣いといふ故は、右申す通り、儒學、佛學を始め、種々さまざまの學問があつて、その道々のこゝろと事とが、盡く皇國の學び事に混雜して、譬へば、彼の八紘九野の水、天漢の流これに注がずといふことなしといふ如くでござる。その通り入混つてある故に、人の心もそれに從つて移り、いづれを是とも、いづれを非ともわかちかねて、言はばまごついて居ることが多くある。それ故に、その混雜をつぶさに分けねば、眞の道の有難き所も顯れず、その混雜をより分けて、眞の道の害となることをいひ顯さうとするについては、よく先方の事をも知らねばならず。彼の唐人蘇子由といふものの、「善與人言者。因其人之言。而爲之言。則天下之辯者服矣。云々」と申したる如く、此方の事ばかり言つたのではいかず。例へば、僧徒を諭すには佛書で言ふと、ぎうの音も出ず。儒者を諭すには儒書で論ずれば、猫に追はれた鼠のやうにかしこまる。されば皇國の純らと正しい道を得ようとするには、それに心得なくてはかなはぬ事でござる。殊にもろ〳〵の學問の道、たとひ外國の事にしろ、皇國人が學ぶからは、そのよき事を選んで、皇國の用にせうとのことでござる。さすれば、實は漢土は勿論、天竺、阿蘭陀の學問をもすべて皇國まなびといつても違はぬほどのことで、即ちこれが皇國人に

して、外國の事を學ぶものの心得でござる。

——古道大意——

一五　方丈記

鴨長明

一　うたかた

ゆく川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみにうかぶうたかたは、かつ消えかつむすびて、久しく止ることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。

うたかた

玉敷の都の中に棟をならべ甍を爭へる、高き卑しき人のすまひは、代々を經てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所もかはらず人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に僅かに一人二人なり。朝に死し夕に生まるゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。

棟をならべ甍を爭ふ

無常を爭ひ去る

知らず、生まれ死ぬる人、いづ方より來りていづ方へか去る。又知らず、かりのやどり誰が爲に心をなやまし、何によりてか目をよろこばしむる。その主人と住家と無常を爭ひ去るさま、いはば朝顏の露に異ならず。あるは露落ちて花殘れり。殘ると雖も朝日に枯れぬ。あるは花しぼみて露なほ消えず。消えずと雖も夕を待つことなし。

およそものの心を知れりしよりこのかた、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、やゝたび〳〵になりぬ。

去にし安元(一)三年四月二十八日かとよ、風烈しく吹きて、靜かならざりし夜、戌の時ばかり、都のたつみより火出で來て、いぬゐに至る。はてには朱雀門、大極殿、大學寮、民部の省まで移りて、一夜がほどに塵灰となりにき。火元は樋口富の小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けるとなん。吹迷ふ風にとかく移りゆくほどに、扇をひろげたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙に咽せび、近きあたりはひ

(一)高倉天皇の御代(一八三七年)。

現心

あぢきなし

(一)高倉天皇の御代(一八四〇年)。

たすら焔を地に吹きつけたり。空には灰を吹立てたれば、火の光に映じてあまねく紅なる中に、風に堪へず吹切られたる焔、飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝうつり行く。その中の人、現心あらんや。或は煙に咽せびて仆れ伏し、或は焔にまぐれて忽ちに死にぬ。あるは又纔かに身ひとつからくして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず。七珍萬寶さながら灰燼となりにき。その費いくばくぞ。こたび公卿の家十六燒けたり。ましてその外は數を知らず。すべて都の中、三分一に及べりとぞ。男女死ぬるもの數千人、馬牛の類邊際を知らず。人の營みなおろかなる中に、さしも危き京中の家を造るとて、寶を費し心を惱ますことは、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。

又治承四年卯月二十九日の頃、中の御門、京極のほどより大きなる辻風起りて、六條わたりまで、いかめしく吹きけること侍りき。三四町をかけて吹きまくる間に、その中に籠れる家ども、大きなるも、

業風

(一)安德天皇の御代(一八四一年)。

ぞめき

なべてならぬ

小さきも、一つとして破れざるはなし。さながらひらに倒れたるもあり。桁、柱ばかり殘れるもあり。又門の上を吹放ちて、四五町が外に置き、又垣を吹拂ひて、隣と一つになせり。況や家の内の寶數を盡して空にあがり、檜皮葺、板類、冬の木の葉の風に亂るゝが如し。塵を煙の如く吹立てたれば、すべて目も見えず。夥しく鳴りどよむ音に、もの言ふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりともかくこそはとぞ覺えける。

又養和の頃かとよ、久しくなりてたしかに覺えず、二年が間飢渴してあさましき事侍りき。あるは春夏日でり、あるは秋冬大風大水など、よからぬことども打續きて、五穀ことごとくみのらず、空しく春耕し、夏植うる營のみありて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。

これによりて國々の民、あるは地を捨てて境を出で、あるは家を忘れて山に住む。さまざまの御祈はじまりて、なべてならぬ法ども

さのみやはみさをもつくりあへん

あまさへ

ありにくきこと

行はるれども、更にそのかひなし。

京のならひ、何わざにつけても、源は田舍をこそ賴めるに、絶えて上る者なければ、さのみやはみさをもつくりあへん。念じわびつゝさま〳〵の寶物かたはしより捨つるが如くすれども、更に目見たつる人もなし。たま〳〵かふるものは金を輕くし、粟を重くす。乞食道のべに多く、憂へ悲しむ聲耳に滿てり。さきの年かくの如く、からくして暮れぬ。あくる年は立直るべきかと思ふに、あまさへ疫病うちそひて、まさるやうに跡かたなし。

二　わづらひ

すべて世のありにくきこと、わが身と棲家とのはかなくあだなるさまかくの如し。況や所により身のほどに隨ひて、心をなやますこと、擧げて數ふべからず。

若しおのづから身數ならずして、權門の傍に居る者は、深く悅ぶ

すぼき

念々に動く

たまゆらも

事はあれども、大いに樂しぶに能はず。歎ある時も、聲をあげて泣くことなし。進退安からず、立居につけて恐れ戰く。例へば、雀の鷹の巢に近づけるが如し。若し貧しくして富める家の隣に居るものは、朝夕すぼき姿を耻ぢて、諛ひつゝ出で入る。妻子僮僕の羨めるさまを見るにも、富める家の人のなゝいがしろなる氣色を聞くにも、心念々に動きて、時として安からず。若し狹き地に居れば、近く炎上する時その害を遁るゝことなし。若し邊地にあれば、往反煩多く、盜賊の難はなれ難し。勢あるものは貪慾深く、ひとり身なるものは人に輕しめらる。寶あればおそれ多く、貧しければなげき切なり。人を賴めば身他の奴となり、人をはごくめば心恩愛につかはる。世に從へば身苦し。又從はねば狂へるに似たり。いづれの所をしめ、いかなるわざをしてか、しばしもこの身を宿し、たまゆらも心を慰むべき。

わが身父方の祖母の家を傳へて、久しくかの所に住む。その後緣

かけ身衰へて、(一)忍ぶ方々しげかりしかば、終に跡とむることを得ずして、三十あまりにして、更に我が心と一つの庵を結ぶ。これをありしすまひになずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりを構へて、はか〳〵しくは屋を造るに及ばず。僅かに築地をつけりと雖も、門たつるにたづきなし。竹を柱として、車宿りとせり。雪降り風吹くごとに危からずしもあらず。所は河原近ければ、水の難深く、白波の恐も騒がし。

すべてあらぬ世を念じ過しつゝ、心をなやませることは、三十餘年なり。その間折々のたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち五十の春を迎へて家を出で、世を背けり。もとより妻子なければ捨難きよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとゞめん。空しく大原山の雲にいくそばくの春秋をか經ぬる。

(一)「住みわびて我さへ軒の忍草、しのぶかたがたしげき宿かな。」(金葉集、周防内侍)

たづきなし

よすが

ここに六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやどりを結べることあり。いはば、(一)旅人の一夜の宿を造り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃のすみかになずらふれば、又百分が一にだも及ばず。とかくいふほどに、齡は年々に傾き、住家は折々に狹し。その家の有樣世の常にも似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。所を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目ごとに掛がねをかけたり。若し心に適はぬことあらば、易く外に移さんが爲なり。その改め造る時幾ばくの煩かある。積むところ僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途いらず。

いま日野山(二)の奥に迹をかくして後、南にかりの日がくしをさし

鴨長明

(一)「亦猶行人之造旅宿、老蠶之成獨繭矣。其住幾時乎。」(慶滋保胤、池亭記)

(二)山城國宇治郡。木幡山の東北。

眉間の光

普賢

(一)六卷。源信僧都の著。

つかなみ

出して、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、うちには西の垣に沿へて、阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並びに不動の像を掛けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黑き皮籠三四合を置く。即ち和歌、管絃、往生要集如きの抄物を入れたり。傍に箏、琵琶おの〳〵一張を立つ。いはゆる折箏、つぎ琵琶これなり。東に沿へて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓を開けて、ここに文机をいだせり。枕のかたにすびつあり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占めて、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。即ちもろ〳〵の藥草を植ゑたり。假の庵のありさまかくの如し。

その所のさまをいはば、南に筧あり、岩を疊みて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら迹を埋めり。谷しげけれど西は晴れたり、觀念のたよりなきに

紫雲

罪障

(一)「世の中を何にたとへん朝ぼらけ、こぎゆく船のあとなきがごと。」(萬葉集、沙彌滿誓)

(二)山城國紀伊郡。宇治川の東岸。

(三)沙彌滿誓。元正天皇の時の人。

(四)「潯陽江頭夜送客。楓葉荻花秋瑟瑟。」(白樂天、琵琶行)

(五)桂大納言源經信。琵琶の名手。嘉保元年(一七五四年)太宰權帥に貶せられた。都督は太宰帥を唐風に呼ぶ稱。

(六)(七)ともに琵琶の名曲。

しもあらず。春は藤浪を見る、紫雲の如くにして、西の方に匂ふ。夏は子規を聞く、語らふごとに死出の山路を契る。秋は日ぐらしの聲耳に滿てり、空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む、つもり消ゆるさま罪障に喩へつべし。若し念佛ものうく、讀經まめならざる時は、自ら休み、自ら怠るに、妨ぐる人もなく、又耻づべき友もなし。ここさらに無言をせざれども、ひとり居れば口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ何につけてか破らん。若し迹の白浪に身を寄するあしたには、岡の屋に行交ふ船を眺めて滿沙彌が風情をぬすみ、若し桂の風葉を鳴らす夕には潯陽の江を想ひやりて、源都督のながれをならふ。若し餘りの興あれば、しば〳〵松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を喜ばしめんとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、自ら心を養ふばかりなり。

あからさま

やんごとなき人

がうな

大かたこの所に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今すでに五とせを經たり。假の庵も稍ふる屋となりて、軒に朽葉深く、土居に苔むせり。自ら事の便に都のさまを聞けば、この山に籠りゐて後、やんごとなき人の隱れ給へるもあまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。度々の炎上に亡びたる家又いくそばくぞ。たゞ假の庵のみのどけくして恐なし。

程せばしといへども夜臥す床あり、晝居る座あり、一身を宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む。これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯に居る。即ち人を恐るゝが故なり。われ亦かくの如し。身を知れゝば、願はず、まじらはず、たゞ靜かなるを望とし、愁なきを樂みとす。

それ三界はたゞ心一つなり。心若し安からずば、牛馬、七珍もよしなく、宮殿、樓閣も望なし。今さびしき住居一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でては、乞食となれることを耻づといへども、歸りてここに居る時は、他の俗塵に着することをあはれぶ。

若し人このいへることを疑はば、魚鳥のありさまを見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味も亦かくの如し。住まずして誰かさとらん。

一六　蓮を栽う

伴　蒿　蹊

庵の坤の方に池あり。もとは心して造りたるさましるきを、情なき人の假住ひしたるほどにや、ちりあくたの湊となしてけり。過ぎし秋ここに移りて、蓬、葎かき拂ひにしついで、この池をもをさむべかりしを、事しげくて打過ぎぬ。冬はかきこもりてのみあれば、心も寄せず。この頃なん思ひおこして、水たゝへ、蓮うゑんとす。

抑、この蓮は佛の道には妙なる法の譬とし、樂みを極むる國の莊嚴にも、一の物として說かれたるやう樣々なり。かれ晉の慧遠法師(一)も蓮社の交を結ぶ。儒の人にして翫びたるは宋の周子はじめにや。(二)蓮は花の君子なるものといへるが、なほ葉に置く露の光も潔き操にたとふべかめり。何かは玉と欺くと詠まれたるは、たゞたはぶれ(三)のみ。かく何の道につけてももてなされて譽あるものなれば、今わが栽うるも思ふところありとや見えん。かれを思ひ、これを悅ばぬにあらねど、まことはさることごとしきすぢを懸くるにあらず。この庭のうちは梅、櫻あり、萩、楓ありて、春秋の見るもの乏しからぬに、夏のかけたるがあかねばなん、昔のさまにかへすのみなり。

伴蒿蹊筆蹟

(一)支那東晉の名僧。廬山白蓮社の祖。義熙十二年(西暦四一六年)歿、年八十三。

(二)周茂叔。宋の熙寧六年(西暦一〇七三年)歿、年五十七。

(三)「蓮葉の濁にしまぬこゝろもて、なにかは露を玉と欺く」(古今集、僧正遍昭)

水邊菊

行水はもとのみつにもあらなくにうつろふ菊の香こそかはらね　蒿蹊

——狩野正信筆——

周茂叔蓮を愛す

凡そ物につきてみづからを戒め、人を教ふるは、賢き人の常にして、器物に銘せるはさらなり、孔子ひじりも水に臨みては逝くものはかくの如きの歎あり、山に登りては魯をすこしきなりとし給ふ思あり。されば、徒に物を弄べば志を喪ふの戒も聞ゆかし。しかはあれど、假初なる事にも、道理がましく人なねいはんは又苦しからずや。離の菊を手に摘みて、のどかに山の端を望むといひし人は、何の心にかあらん。これ等を味はひなき味はひなどいはんは、なほ心あるに似たりかし。

風かをる汀になれて夏は見ん
浮葉のみどり花のしろたへ。

水都水郷〔自修文〕

大庭景秋

水の都とは、いふまでもなくヴェニスであるが、私は嘗て初夏の二日をかし

(一)「子在川上曰逝者如斯夫不舍晝夜」（論語）
(二)「孔子登東山而小魯。登泰山而小天下」（孟子）
(三)「採菊東籬下悠然見南山」（陶淵明）
(四)柯公と號する新聞記者。山口縣の人。
(五)Venice イタリー北部の都府。ヴェニス灣に臨み、市街は數多の小島上に立つて居る。風景の美を以て名高い。

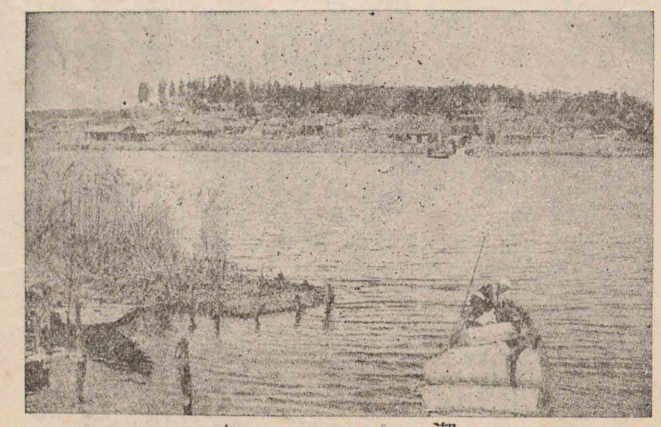
こに過した時、端なくも霞ヶ浦畔の水郷潮來を思ひ出した。そして垢抜のした風流をやるべく、イタリーなるこの水の都の月の夜に、ゴンドラを浮かべて磯節を謠つて見たいと思つた。よし流水行雲に天意の發露を見得るラスキンの審美眼はなくとも、苟も西洋史の一端を知るものには、史興豐なヴェニスを忘れることは出來まい。又苟も水邊の景物を愛するものには、詩趣に富めるヴェニスを忘れることは出來まい。

或はヴェニスを我が堺に比較する人がある。アドリヤ海を瀬戸内海とし、ヴェニス灣を茅渟の浦とするならば、ヴェニスは正に堺に相當する。否獨り地理の上ばかりでなく、両者が世界的貿易港として或時代の間輝いたことも、亦同樣である。しかも水の都としての氣分は、より多く潮來出島を聯想せしめる。詩佛が「試從三十二橋頭望、何水何橋無二月明。」と潮來を詠じた一句は、移して以てヴェニス大小の運河を謠ふに足ると思ふ。サン・マルコの寺は鹿島神宮に相當するであらうが、寺の前の俗世間的淺草觀音式の仲見世と鳩の群は、鹿島神宮の森嚴崇高な氣分には及びもつかぬ。たゞ一百二十の島嶼の上に築かれた都市、

(一)常陸國の南部にある湖。周回三十六里。
(二)常陸國行方郡。霞ヶ浦の東南に臨む。潮來川(北利根川)を隔てて出島と對する。
垢抜のした云云　俗氣のない淡泊な趣のある遊。
(三)Gondola. ヴェニスで用ひられる細長い舟。
(四)John Ruskin. 英國の美術批評家兼社會改良論者。(西暦一八一九年—一九〇〇年)
流水行雲云々　流れる水やただよふ雲に自然の意志のあらはれたを感ずること。
審美眼　美醜の性質や法則などを識別する眼力。
(五)Adriatic Sea. イタリーの東にある海。
(六)和泉近海の稱、又廣く大阪灣をもいふ。
(七)詩人。姓は大窪、名は行。常陸の人。
(八)出島にある十二個の小橋。
(九)St. Marco. ヴェニスにある有名な大寺院。
(一〇)門と堂の間にある店。
(一)名は友房。克堂はその號。政治家。熊本の人。明治三十九年歿、年五十三。
(二)氣がふさいでうつたうしいので、幾分晴れ晴れするかと思つて戸外に出て見まはしたが、山にもやはり雲がかゝつて居るとの意。
蒹葭蒼茫の間　あしが廣々と生茂つて居る間。

その中を縱横する無數の運河、さうしてその上に架した大理石の橋、實に三百八十橋。詩佛の句ではないが、いづれの水いづれの橋も、月を追うて月を得られざるなき實景である。故佐佐克堂(一)がイタリー漫遊中の句に、「殘山剩水尚依々。」とあるが、しかもヴェニスの水だけは歴史經濟を通じての水で、なか〳〵剩水どころではなく、この水都の民とともに永久のものである。

たゞ風景觀から比較すると、ヴェニスは遂(二)に山水を収め得た潮來の畫趣には及ばぬ。「あまりつらさに出て山見れば、雲のかゝらぬ山はない。」ヴェニスにはこの山が見られぬ。蒹葭蒼茫の間から筑波一帶の山を望むやうな水郷の背景がなく、霞ヶ浦の景に一點色を添へる浮島の如き島影もない。ヴェニスの誇は飽くまでもゴンドラと大



潮來

理石の橋とである。潮來の舊記によれば、「家は河中に作り出し、舫町に乘り、川向の出島に到る。」とある。舫町のいかなる小舟であるかはわからぬが、エジプト時代の戰艦を摸した古雅なゴンドラの舟子が終始船尾に立つて、曲折した運河の辻々で、一種の掛聲を合圖に櫂の音閑けく輕く漕去るさまは、蓋し天下一品である。かゝる水路の舟行に、水を渡つて傳はるサン・マルコ寺の鐘聲は、閑寂なゴンドラの氣分に調和するが、近頃漸く殖えて來たモーター・ボート(一)や、小汽艇のけたたましい笛聲は、確かにヴェニス趣味の破壞である。

然るに畫舫にも石橋にもかへ難いこの地の名物が今一つある。旅行の神ともいふべきマルコ・ポーロ(二)その人である。この水の都に生まれたマルコ・ポーロが、歐亞の大陸を橫斷し、往復して、東方の國々を西方に紹介した事は、何となく神業のやうに感ぜられるが、霞ヶ浦畔の佐原からも、亦旅行上の一偉人が出てゐるのは、更に神意の偶然でないことを想はしめる。偉人とは即ち我が測量學の鼻祖にして地理學者たる伊能忠敬先生である。

——世界を家として——(三)

(一) Motor boat.

(二) Marco Polo. イタリーの旅行家。（西暦一二五四年—一三二三年）

(三) 大庭景秋の著。世界を漫遊した紀行感想集。大正六年東京至誠堂發行。

一代の宗師百世の儀表

成道

正覺

一七　世界の四聖　その一

高山林次郎

生まれて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人にあらずんば、誰かこれを能くせんや。釋迦、孔子、ソクラテース、キリストの四人世呼んで世界の四聖とたゝふるは、宜なるかな。

高山林次郎

釋迦は西暦紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生まる。父は淨飯王、母は摩耶夫人、その本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生まれれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九の歳その妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隱れて、道を修むること六年、遂に人生の奧義を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、中天

巡錫　元々歸命の大道　木鐸　令聞

竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒に思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とにより て安心の道を求めたり。その流派を樹てて相爭ふところは、畢竟名目の優劣のみ。未だ一世の元々をして、歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生まれ、その浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をしてその歸依するところを知らしめたり。

孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去ること二千四百餘年の昔、支那の魯國に生まる。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり、學德愈〻進む。魯の定公の時に至り、擢でられて大司寇の職に就く。治績大いに擧り、

老軀を挺す　蕩然として地を拂ふ　教化の陵夷　狂瀾を既倒に廻らす　老脚蹉跎

内外その風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて、四方の遊説を試みぬ。

當時の支那はいはゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にしてその君を弑する者あり、或は子にしてその親を害する者あり。强は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子すでに志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻らさんとす。志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。ここに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じていはく、「嗚呼、吾が道遂に窮す。世遂に吾を知るものなきか。」と。

下學して而して上達す

(一) Athens.

詭辯學派

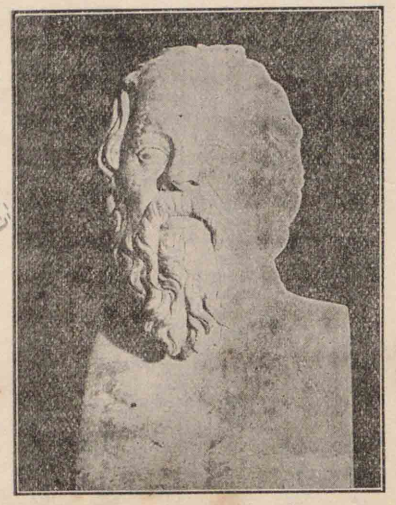
門弟子貢慰めていはく、「何ぞ夫子を知るものなからんや。」孔子答へていはく、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。我を知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と。後幾ばくもなくして歿す。時に七十三。

ソクラテースはギリシャのアゼンス府(一)に住める一彫刻師の子なり。その生まれたるは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦、孔子と年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりといふべし。ギリシャの當時はいはゆる詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の爭に止り、道德は空文の上にのみ貴ばれたり。その狀なほ釋迦當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して、殆ど裨益するところなかりき。ソクラテースは慨然として時弊の救濟を以て自ら任じ、盛に道を講

倔謂

喬木は風に折らる

じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻擊して、一歩も假借せず。倔謂の正議、その稀代の雄辯と相伴なひて一世を風靡せり。



ソクラテース

然るに「喬木は風に折らる。」といふ喩に漏れず、群小のソクラテースに快からざるもの相計りて、國法に背けるものとしてソクラテースを讒訴せり。その訴狀にいはく、「ソクラテースは國教を信ぜずして異教を説き、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし。」と。ソクラテースがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども判官はソクラテースを

以て傲慢不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテース泰然として驚かず、いはく、「命のみ。」と。

ソクラテースの獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死、靈魂、未來の事を說き、人の脫獄を勸むるものに對しては、輒ち答へていはく、「予はたゞ正義に導かれんのみ。死又何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや。」と。終に從容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子、遺言を求む。ソクラテースいはく、「爾一鷄を以てアスクレピアス[一]の神に捧げよ。」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしが爲ならん。ギリシャの聖人ソクラテースはかくの如くにして逝きぬ。年七十。

キリストは本名をヤソといふ。キリストとは「膏灌がれたる者。」といふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。ユデヤのベトレヘム[二]に生まる。西曆紀元第一年はその生後四年目に當れり。父はヨセフ[三]と呼べ

(一) Asclepius. ギリシャの醫藥の神。謝を致す
(二) Bethlehem
(三) Joseph.

る賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歲の頃豫言者ヨハネ[一]の洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間、ユデヤの各地を歷遊し、諸の迫害に屈せずして、その福音を傳へたり。

抑當時はローマ帝國の榮華、正にその極に達し、禍亂の萠芽その中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日なし。殊にキリストの故國なるユデヤは、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇なる淫祠を崇拜して益放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄し形式に拘泥して、空しく人を惑はすのみ。ここに於て、一世の人心は悉く偉人の現出してこの暗黑の社會を照破せんことを渴望せり。キリストこの間に生まれ、自ら救世の使命を負へる神の子なりと稱し、昂然その偉大なる新教理を宣傳するや、遠近靡然としてこれに赴く。僧侶、學者、官吏等はこれを喜ばず、以て猥りに新法異

(一) Johannes.

收斂
放縱の俗
救世の使命

説を唱へて民を迷はすものなりとなし、キリストを捕へて磔殺の刑に處す。キリスト豫めこの事あらんを慮り、晏然として騷がず、靜かに祈りていはく、「神よ、彼等を宥せ。彼等はその爲すべきところを知らざればなり。」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧ていはく、「エルサレム(一)の女子よ、吾が爲に哭くこと勿れ。たゞ己と己の子との爲に哭け。」と。かくの如くしてキリストは三十三年の短命を以て十字架上の露と消え去りぬ。キリストの死後、その弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘む。キリスト教即ちこれなり。

(一) Jerusalem.

一八　世界の四聖　その二

以上は四聖の略傳なり。その人物、事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべきところなり。四聖の中、釋迦を除きては、

いづれも轗軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテースとキリストとはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔殺せられたり。慘憺たりと謂ふべし。然れどもこれ等の人々の志すところは天下後世に在り、現世の禍福と一身の安危とは毫もその顧慮するところにあらず。故にその死に就くや、晏如としてなほ歸するが如し。孔子はその一身の不幸を憂へずして、却つて「吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と嗟歎せり。釋迦は衆生の爲にその妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテースは死罪の脅迫に遇うて、揚言していはく、「正義を信ずるものにとりて、死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、その一日即ち國民の迷をさまさざるべからず。」と。キリストは己を罪に陷るゝものの爲に神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈

浩大無邊

悲の浩大にして無邊なるや。

四聖はその生まれたる所と時とを異にす。故にその教理にも亦多少の差違なきを得ず。今その要略を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は煩惱を斷滅して、涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始りて苦に終る。生老病死いづれか苦に非ざるべき。故に吾人は現在を苦界と觀ぜざるべからず。

釋迦

而して苦の原因は情慾に在り、情慾の原因は「我」の一念に執着するに在り。故に吾人は「我」の一念を脱却して無我無心の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃即ちこれなり。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平かにするに在り。而して身を修むる基は孝に在り。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生まれながらにして、美德を天に稟くれども、後天の氣質によりて、これを完うすること能はざるもの多し。教育の要ここに於てかあり。すでに教育を受けて身すでに修らば、家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら治るべく、國治らば、天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始り、治國平天下に終るものと見るを得べし。

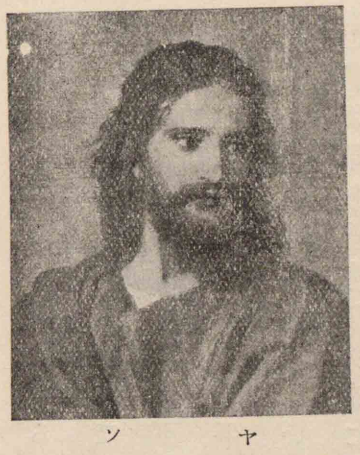
後天

知德合一

ソクラテースの教はいはゆる知德合一說なり。思へらく、「眞正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、ともに知識道德の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となさば、正義おのづからその中に在り。正義は靈魂の滿足なり。而して靈魂は肉體と異にして、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行

ふ、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道德は富貴の爲に存せず。然れども富貴は道德の中に在り。」と。

キリストの教は愛の教なりと稱せらる。いはゆる山上の垂訓は、三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。いはく、



ソ　ヤ

「心の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲しむものは福なるかな、その人は慰められるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、その人は憐を得べければなり。心の清きものは福なるかな、その人は神を見るべければなり。惡に敵することなかれ。人若し汝の右の頰を打たば、左の頰をも轉らしてこれに向けよ。汝の隣人を慈しみて、

何ぞ己が目にある梁木を見ざる

汝の敵を愛せよ。人に見せんが爲に義をその前に行ふこと勿れ。右の手の爲すところを左の手に知らしむること勿れ。僞善者の行に倣ふこと勿れ。隱れたるを鑑給ふ神は、顯に報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非すること勿れ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩け、然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る路は濶く、その門は大きく、これより入るものは多し。嗚呼、いかに生命に至る路は窄く、その門は小さく、これを見出すものの少きぞや。凡そこの訓を聽きて行ふものは、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざるものは、沙上に屋を架せる愚人の如し。」と。キリスト教の精髓は、後世の人いかなる色彩を加ふとも、畢竟この山上の垂訓を出でず。

かくの如きは四聖の傳記及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝いて

すでに幾千年ぞ。而してこの教の今なほ凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠の救濟者なりと謂ふべし。その遺德の高大なること、何を以てかこれに比せんや。

——樗牛全集——

一九　芳宜園大人の靈を祭る

村田春海

ここに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて芳宜園(はぎぞの)の大人のおくつきの御前に菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを燒きて、うなねつきて申さく。あはれ悲しきかも、君は吾に十とせいひて一とせのこのかみにおはするなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齡におはして、吾はまだわらはにてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びにゆきかひたる時、あしたに參るとては君のみはかしのしりへに從ひ、ゆふべに罷るとては君の御袖のもとに縋りて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならん。書讀むとては君を師ともたふとみ、歌作るとては吾をおとととえのつらにぞ教へ給ひける。

村田春海筆蹟

中ごろにして君は仕の道に暇なくおはし、吾は世のさがにかゝづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君仕をしぞき給ひて後は、吾も同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとては吾道しるべをなし、月を思ふとては君が舟に相乘り、憂き事もともに憂へ、喜ばしき節もともに喜びて、世にありふる業の、まめごともあだごとも、かたみ

(一)加藤千陰。
うなねつきて
このかみ

(一)賀茂眞淵。
おととえ
閑居燈
世の事はそむきはてたる窓のうちになともし火の花をみすらん　春海
世のさが
ありふる
まめごと
あだごと

に隔なく心をかはせつること、今にはたとせ。その初を繰返し數ふれば、あひ友たることすでに五十とせにぞ餘りける。さるを今おくれ奉りて、いつの世にか相見ん、いづれの時にかことはん。常なきは人の身の習ぞと知れど、これをいかでか歎かざらん。かゝるを誰かはよく堪へん。

あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今を捨てて古に復り、青雲の高き心しらひを求め、賤機の文あるみやびごとを尊みいへれど、(一)くひせを守り、(二)舟にきだつくる輩、かれに泥み、ここにひかれて、なほ怪しみとがむる類は多く、たまあひてよくうけひく人なん稀なりしを、君ひとり心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目のあたり相うづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、いにしへぶりの歌世に盛になりにたるなり。

(一)「宋人有ニ耕レ田者一。田中有レ株。兎走觸レ株。折レ頸而死。因釋ニ其耒一而守レ株。冀ニ復得レ兎。兎不レ可ニ復得一。而身爲ニ宋國笑一。」（韓非子）

(二)「楚有ニ涉レ江者一。其劍自ニ舟中一墜ニ于水一。遽刻ニ其舟一曰。是吾劍所ニ從墜一也。舟止。從ニ其所レ刻處一入レ水求レ之。舟已行矣。而劍不レ行。求レ劍若レ此。不ニ亦惑一乎。」（呂氏春秋）

面おこし
價なき寶
言あげ

そのおのづから詠みいで給へる歌を見るに、古き調、新しき姿、とりどりに備らざるはなし。その古を寫せるは藤原、寧樂の御世に及び、後の巧に倣へるは堀河、鳥羽の御時に下らず。心に思ふ事は口に盡さゞることなく、目に觸るゝものは言の葉にのせざることなんあらざりける。これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざる人なし。又事好みの人は、その名を知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君のひと歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ深く喜びける。

然るを今黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがごちの歎のみかは、おほかたの世の人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらん。かゝるを誰かは慕はざらん。あはれ悲しきかも。わがかく言あげするを、泉の下にもさやかにきこしめし、天翔りても遙かに見そなはせとなん申す。

——琴後集——

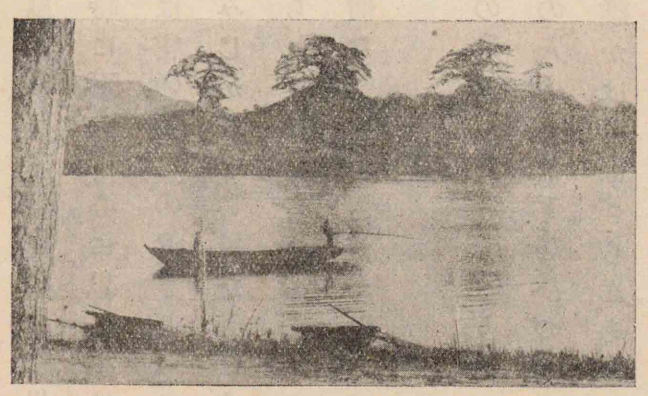
二〇　澄の江の浦

坪内逍遙

それ渤海(一)の東方に、
底ひ知れざる壑あるを、
名づけて歸墟といふとかや。
八紘九野の水盡し、
空に溢るゝ天の河、
流の限り注げども、
無増無減と唐土の、
至人(二)が寓言今ここに、
見る目はるけきわたの原。
北を望めば蒼茫と、

(一)「渤海之東。不レ知二幾億萬里一。有二大壑一焉。實惟無底之谷。其下無レ底。名曰二歸墟一。八紘九野之水。天漢之流。莫レ不レ注レ之。而無レ增無レ減焉。」（列子）

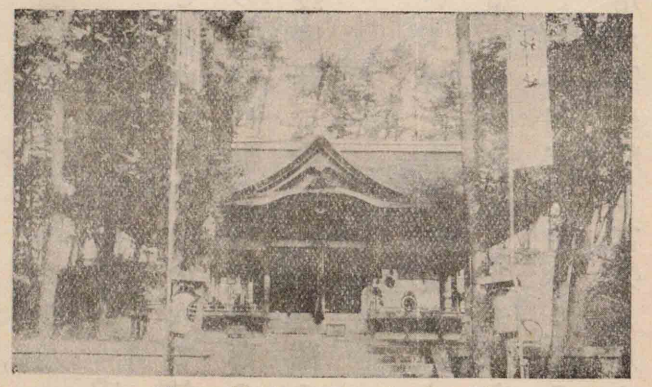
(二)列子。名は禦寇



澄の江（丹後網野）

八重の潮路は霞こめ、
蓬(一)が島にや通ふらん。
西を見やれば千里の波、
浩蕩としてきはまりなく、
旦に洗ふ高麗の岸、
夕陽もそこに夜の殿。
錦繡の帳暮れゆけば、
むらさき匂ふ空の色、
なにに驚く早紅葉の、
頻りに墜ちて癯する山、
秋老けぬれば欸乃を、
絡りて渡る雁が音に、

(一)蓬萊の島。「渤海之東有二五山一。岱輿、員嶠、方壺、瀛洲、蓬萊也。」（列子）



浦島神社（丹後網野）

氣も澄(一)の江の浦の波、
幾代の調や疊むらん。

(一)丹後國竹野郡。いはゆる浦島子の故郷。

二　菊花の約　その一

上田秋成

――新曲浦島――

輕薄

清貧をあまなふ

青々たる春の柳、家園に種うること勿れ。交は輕薄の人と結ぶこと勿れ。楊柳茂り易くとも、秋の初風の吹くに耐へめや。輕薄の人は交り易くして、去るも亦速なり。楊柳幾度春に染めども、輕薄の人は絶えて訪らふ日なし。

播磨の國加古の驛に丈部左門といふ博士あり。清貧をあまなひて、友とする書の外は、すべて調度の煩はしきを厭へり。老母あり、孟母の操に讓らず、常に紡績を事として、左門が志を助けぬ。その季女は同じ里の佐用氏に養はる。この佐用が家は頗る富榮えけるが、丈部母子の賢きを慕ひ、娘を娶りて親族となり、屢事に託せて物を贈

起臥も思ふに任せず

ると雖も、口腹の爲に人を累さんやとて、敢へて受くる事なし。

一日左門同じ里の何某が許を訪ひて、いにしへ今の物語して興じける時、壁を隔てて人の苦しむ聲いと哀に聞えければ、主に尋ぬるに、主「西の國の人と見ゆるが、伴に後れしとて、一宿を求められしを、卑しからぬ士と見しまゝ逗め參らせし」に、その夜邪熱劇しく、起臥も思ふに任せぬがいとほしさに、三日四日を過しぬれど、何地の人とも定かならぬに、主も思はぬ過し出で、心地惑ひぬ。」といふ。左門聞きて、「悲しき物語にこそ。主の心安からぬもさる事なれど、病苦の人のしるべなき旅の空にこの疾を憂へ給ふは、わきて胸苦しくおはすべし。そのやうをも看ばや。」といふを、主とゞめて、「瘟病は人を過つものと聞ゆ

死生命あり

漂客

るものから、家童らにも敢へてかしこに行かしめず。立寄りて身を害し給ふこと勿れ。」左門笑うていふ、「死生命あり、何の病か人に傳はるべき。これ等は愚俗の言にて、吾が們は取らず。」とて、戸を推して入りつゝその人を見るに、主が語りしに違はで、なみの人にはあらぬが、病深しと見えて、面は黄に、肌は黑く瘦せ、古き衾の上に悶え臥す。人懷かしげに左門を見て、「湯一つ惠み給へ。」といふ。左門近くよりて、「士憂へ給ふこと勿れ。必ず救ひ參らすべし。」とて、主と計りて藥を選み、自ら方を案じ、自ら煑て與へ、粥をすゝめて病を看ることなほ同胞の如し。かの武士、左門が情に厚きに涙を流して、「かくまで漂客を惠み給ふ。死すとも御志に報い奉らん。」といふ。左門慰めて、「凡そ疫には日數あり、そのほどを過ぐれば壽命を過たず。吾日々に詣でて仕へ參らすべし。」と、實やかに契りつゝ、心を用ひて助けけるに、病稍減じて、心地清しく覺えければ、かの士、主にも懇に詞を盡し、左門が陰

(一)能義郡。今廣瀨町の内。

(二)仁多郡三澤城主三澤氏。城地は今三澤村といふ。

(三)飯石郡三刀屋城主三刀屋氏。城地は今三刀屋、一宮の兩村に分れた。

德を尊みて、その生業をも尋ね、己が身の上をも語りていふ、「吾は出雲の國松江の郷に人と成りし赤穴宗右衛門といふものなるが、僅かに兵書の旨を明らめしによりて、富田(一)の城主鹽冶掃部介、吾を師としてもの學び給ひぬ。さても吾、近江の佐々木氏綱へ密使に選ばれて、かの館に逗る中、前の城主尼子經久、山中黨を語らひて、大晦日の夜不慮に城を乘取りしかば、掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて、鹽冶は守護代なれば、三澤(二)、三刀屋(三)を助けて、經久を亡し給へとすゝむれども、氏綱は外勇にして內怯なる愚將なれば果さず、かへりて吾を國に逗む。故なき所に永く居らじと、己が身一つを竊みて還る路にこの疾に罹りて、思ひかけずも師をいたはしけるは、身に餘りたる御恩にこそ。吾半生の命をもて必ず報い奉らん。」左門いふ、「見るところを忍びざるは人たるものの心なるべければ、厚き詞をささむるに故なし。なほ逗りていたはり給へ。」と

おろ〳〵

青雲のたより

いふに、赤穴實ある詞をたよりにて日を經るまゝに、物みな平生に邇くぞなりにける。

左門はよき友得たりとて、日夜交りて物語するに、赤穴も諸子百家の事おろ〳〵語り出で、とひ辨ふる心愚かならず、終に兄弟の盟をなす。赤穴五歳長じたれば、兄たるべき禮儀ををさめて、左門に向かひていふ、「吾父母に別れまゐらせていと久し。賢弟が老母は即ち吾が母なれば、新に拜み奉らんことを願ふ。老母憐みて幼き心をうけ給はんや。」左門喜に堪へず、「母常に我が孤獨を憂ふ。信ある言を告げなば齡も延びなんに。」と、伴なひて家に歸る。老母喜び迎へて、「吾が子不才にて學ぶところ時にあはず、青雲のたよりを失ふ。願はくは捨てずして兄たる教を施し給へ。」赤穴拜していふ、「大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず。吾今母公の慈愛を蒙り、賢弟の敬を受く、何の望かこれに過ぐべき。」と、喜びうれしみつゝぞ逗りける。

問はでもしるき

きのふけふ咲きぬると見し尾上の花も散りはてて、涼しき風による涙に、問はでもしるき夏の初になりぬ。赤穴、母子に向かひて、「吾近江を遁れ來りしも、雲州の動靜を見ん爲なれば、一たび下りてやがて歸り來り、御恩を返し奉るべし。今の別を賜へ。」といふ。左門いふ、「さあらば兄長いつの時にか歸り給ふべき。」赤穴いふ、「月日は逝き易し。遲くともこの秋は過さじ。」左門いふ、「秋はいつの日を定めて待つべき。願はくは約し給へ。」赤穴いふ、「重陽の佳節をもて歸り來る日とすべし。」左門いふ、「兄長必ずこの日を誤り給ふな。一枝の菊花に薄酒を備へて待ち奉らん。」と、互に情を盡して、赤穴は西に歸りけり。

二三　菊花の約　その二

あら玉の月日は疾く經ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊にほやかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも早く起出でて、草の

八雲たつ國

人の心の秋

屋の席を拂ひ、黄菊白菊二枝三枝小瓶に挿し、嚢をかたぶけて酒飯の設す。老母いふ、「かの八雲たつ國は山陰の果にありて、ここへは百里を隔つと聞く。けふとも定め難きに、その來しを見て物すとも遲からじ。」左門いふ、「赤穴は信ある武士なれば、必ず約を誤らじ。その人を見てあわたゞしからんは、思はんことのはづかし。」とて、美酒を買ひ、鮮魚を煑て厨に備ふ。

午時も稍傾きぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて、心醉へるが如し。老母、左門をよびて、「人の心の秋にはあらずとも、菊の色濃きはけふのみかは。歸り來る信だにあらば、空は時雨にうつりゆくとも、何をか怨むべき。入りて臥しもして、又翌の日を待つべし。」とあるに否み難く、母をすかして前に臥さしめ、若しやと戸の外に出でて見れば、銀河影消え〳〵に、氷輪我のみを照らして淋しきに、軒守る

待ちわぶ

犬の吼ゆる聲すみわたり、浦波の音ぞここもとにたちくるやうなる。月の光も山の端に暗くなれば、今はとて戸をたてて入らんとするに、たゞ看るおぼろなる黑影の中に人ありて、風のまに〳〵來るを怪しと見れば、赤穴宗右衛門なり。躍りあがる心地して、「小弟早くより待ちて今に至りぬ。盟違へで來り給ふことのうれしさよ。いざ入らせ給へ。」といへど、うなづくのみにて物をもいはず。左門進みて南の窓の下に迎へ、座につかしめ、「兄長來り給ふことの遲かりしに、老母も待ちわびて、あすこそと臥所に入らせ給ふ。寢させ參らせん。」といふに、赤穴又頭を振りてとゞめつゝ、更にものをもいはず。左門いふ、「すでに夜をつぎて來給ふに、心も倦み、足も疲れ給ひつらん。幸に一杯を酌みてやすませ給へ。」とて、酒を煖め、下物を列ねてすゝむるに、赤穴袖をもて面を掩ひ、その臭を忌みさくるに似たり。左門いふ、「井臼の力はた、もてなすに足らざれども、己が心なり。いやしみ給

腹心爪牙

ふこと勿れ。」赤穴なほ答もせで、長き息をつきつゝ、しばししていふ、「賢弟が信ある饗應をなど否むべき理あらん。欺くに詞なければ、實を以て告ぐるなり。必ず怪しみ給ふな。吾は現在の人にあらず、きたなき靈の、かりに形を見せつるなり。」左門大いに驚きて、「兄長何故にこの怪しきこと語り出で給ふや。更に夢とも覺え侍らず。」赤穴いふ、「賢弟と別れて國に下りしが、國人大かた經久が勢につきて、鹽冶の恩を顧るものなし。從弟赤穴丹治の富田の城にあるを訪らひしに、利害を說きて吾を經久に見えしむ。熟〻經久が爲すところを見るに、萬夫の雄人に勝れ、能く士卒を訓練すと雖も、智を用ふるに狐疑の心多くして、腹心爪牙の家の子なし。永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約あることを語りて去らんとすれば、經久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外に放たずして、遂に今日に至らしむ。この約に違ふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思

蟲の聲花も色ある初秋の夜よしやこよひ月の遊ひせん　無腸

聲を呑む

ひ沈めども、遁るゝに方なし。古人もいふ、『人一日に千里を行くことも能はず、魂能く一日に千里をも行く。』と。この理を思ひ出でて自ら及に伏し、今夜陰風に乘りてはる〴〵來り、菊花の約につく。この心を憐み給へ。」といひ終りて、涙湧出づるが如し。今は永き別なり。たゞ母公に能く仕へ給へ。」とて、座を起つと見しが、かき消す如く見えずなりにけり。左門あわててとゞめんとすれば、陰風に眼くらみて行方を知らず。俯向につまづき倒れたるまゝに、聲を放ちて大いに哭く。老母目ざめ、驚き立ちて左門がある所を見れば、座上に酒瓶、魚盛りたる皿どもあまた列べたるが中にふし倒れたるを、いそがはしく扶け起して、「いかに。」と問へども、たゞ聲を呑みて泣く〴〵更に言な

上田秋成筆蹟

漿水

まさなき

身を翰墨によす

し。老母問うていふ、「赤穴が約に違ふを怨むとならば、あす若し來らば言なからんものを。」と强く諫むるに、左門漸く答へていふ、「兄長今夜菊花の約に來る。酒肴をもて迎ふるに、再三辭み給うていふ、しかじかの事にて約に背くが故に、自ら及に伏して陰魂百里を來るといひて、見えずなりぬ。それ故にこそは母の眠をも驚かし奉れ。たゞたゞ赦し給へ。」と潸然と泣入るを、老母いふ、「牢裏に繫がるゝ人は、夢にも赦さるゝを見、渴する者は夢に漿水を飲むといへり。汝も亦さる類にやあらん。能く心を鎭むべし。」とあれども、左門頭を振りて、「信に夢のまさなきにあらず、兄長はここもとにこそありつれ。」と、又聲をあげて泣倒る。老母も今は疑はず、相よびてその夜は泣明しぬ。

翌日左門母を拜していふ、「吾幼より身を翰墨によすと雖も、國に忠義の聞えなく、家に孝信を盡さず、徒に天地の間に居る。兄長赤穴は一生を信義の爲に終ふ。小弟けふより出雲に下り、せめては骨を

今日を久しき日

生は浮きたる泡の如く旦に夕を定め難し

藏めて信を全うせん。尊體を保ち給うて暫くの暇を賜ふべし。」老母いふ、「吾が兒かしこに去るとも、早く歸りて老が心を休めよ。永く逗りて今日を久しき日となすこと勿れ。」左門いふ、「生は浮きたる泡の如く、旦に夕を定め難くとも、やがて歸り參るべし。」とて、涙を振うて家を出で、佐用氏に行きて老母の介抱を懇に賴み聞え、出雲の國に參る路に、飢ゑて食を思はず、寒さに衣を忘れて、まどろめば夢にも泣明しつゝ、十日を經て富田の大城に至り、まづ赤穴丹治が宅に行く。丹治迎へ請じて、「翼ある物の告ぐるにあらで、いかに知らせ給ふべき謂れなし。」と頻りに問ひもとむ。左門いふ、「士たる者は富貴消息の事ともに論ずべからず、たゞ信義をもて重しとす。兄長宗右衛門一旦の約を重んじ、空しき魂の百里を來るに報ずとて、日夜を逐うてここに下りしなり。吾が學ぶところに就いて士に尋ね參らすべき旨あり。願はくは明らかに答へ給へかし。昔魏の公叔座病の牀に

社稷

横死

臥したるに、魏王自ら詣でて手をとりつゝ告げけるは、『若し忌むべきことあらば、何人をして社稷を守らしめんや。吾が爲に教を遺せ。』とあるに、叔座いふ、『商鞅年少しと雖も奇才あり、王若しこの人を用ひ給はずば、これを殺しても境を出すこと勿れ。他の國に行かしめば、必ず後の禍となるべし。』と懇に教へて、又商鞅を私に招き、『吾汝を勸むれど王許さゞる色あれば、用ひずばかへりて汝を害し給へと教ふ。これ君を先にし臣を後にするなり。汝早く他の國に去りて害を免るべし。』といへり。この事、士と宗右衛門とに比べてはいかに。丹治たゞ頭を低れて言なし。左門座を進みて「兄長宗右衛門、鹽治が舊交を想ひて尼子に仕へざるは義士なり。士が舊主の鹽治を捨てて尼子に降りしは士たる義なし。兄長が菊花の約を重んじ、命を捨てて百里を來しは信ある極なり。士が今尼子に媚びて骨肉の人を苦しめ、この横死をなさしめしは友とする信なし。經久强ひてとゞめ

家眷

(一)哲學者。文學博士。京都帝國大學講師。岡山縣の人。明治三十三年歿、年三十六。

言ふもさらなり　いふまでもない。

(二)武士は食はなくとも楊枝をつかつて平氣なる顏をして居る。

相身互　わが身にひきくらべて他を思ひやること。

給ふとも、久しき交を思はば、私に商鞅、叔座が信を盡すべきに、たゞ榮利にのみ走りて士家の風なきは、即ち尼子の家風なるべし。吾今信義を重んじて、わざ〳〵ここに來る。汝は又不義の爲に汚名を遺せ。」とて、いひも終らず扳打に斬りつくれば、一刀にてそこに倒る。家眷ども立騷ぐ間に、早く逃れ出でて跡なし。尼子經久この由を傳へ聞きて、兄弟信義の篤きを憐み、左門が跡をも强ひて追はせざりきとなり。あゝ、輕薄の人と交は結ぶべからずとなん。——雨月物語——

俚諺論〔自修文〕

(一)大西祝

一國民の言ひなれたる俚諺の內容を深く研究すれば、その國民の歷史、氣質、風俗、人情、學術、宗教、社會制度等、その一切の生活と、その生活の理想とに就いて發見するところ多々あるべし。「花は櫻木、人は武士。」といふ美しき諺は言ふもさらなり、(二)「武士は食はねど高楊枝。」「武士は相身互。」といふ如きは、我

地頭　鎌倉幕府の職で、軍役を勤め、盜賊兇從等を捕へ、隨つて權力があつたので、人民は是非を問はずその言に從つた。

他生の緣　前の世からのいんねん。

〔一〕子は過去、現在、未來とも離れないものの意。首枷は罪人などの首にはめる刑具。

が國の歷史に大光彩を放てる武士といふ階級の理想を窺ふに足るべく、又これによりてかゝる理想を愛重したりし全國民の氣風を察し得べし。「泣く子と地頭には勝たれぬ。」といふを見ば、千萬言の歷史的叙述に劣らず、我が國の歷史の或時代に於ける地頭といふものの勢力のいかなりしかを察知し得べく、「女は三界に家なし。」「貞女は兩夫に見えず。」といふなどは、我が國に固有なる諺とはいふべからざれども、亦以て婦女子に關する我が社會制度の一面を窺ふに足るべく、「嫁が姑になる。」「老いては子に從へ。」といへば、我が國の家族制度を示すところあり。「さはらぬ神に祟なし。」「棄てる神あれば拾ふ神あり。」「正直の頭に神宿る。」「苦しい時の神だのみ。」などは宗教思想を示すべく、「袖ふり合ふも他生の緣。」といへば、以て佛教によりて注入せられたる因果思想を見るに足るべし。

歐洲諸國の諺には、夫婦の關係をいへるもの甚だ多く、我が國にては寧ろ親子の關係をいへるもの多きが如し。「親の心子知らず。」「子を知るもの親にしかず。」「かはゆい子には旅をさせよ。」「〔一〕子は三界の首枷。」「子が思ふより親は百倍。」といふなど、親の慈愛をいふや至れり盡せり。その上に「子よりも孫はかはゆい。」

稱ふるものから　となへはするものの。主我心　自分の利益を主とする心。利己心。

〔一〕もらふ物なら夏のあついのに小袖でも遠慮せぬ。

〔二〕敵の家でも食べることが出來たら食べよ。

〔三〕泣く子でも人の目を見てその意中をくむ。

〔四〕「子曰。知レ之爲レ知レ之。不レ知爲レ不レ知。是知也。」（論語）

といへる、何の言かこれにまさりて孫に對する愛のこまやかなることを發表するものぞ。かく親の慈愛を稱ふるものから、俚諺は又能く人情の他面をいふ。

「子を棄つる藪はあれど身を棄つる藪なし。」とは、吾人の主我心を穿てるものと謂ふべし。

一般の人情に自利の念ほど強きはなかるべし。俚諺のいかに多くが損得の念を主とせるものなるかを見よ。而してその中にいかによく普通の人情を穿てるものあるかを見よ。「〔一〕下さる物は夏も御小袖。」「〔二〕かたきの家でも口をぬらせ。」「ころんでもたゞは起きぬ。」「〔三〕泣く子も目を見る。」まことに然り。泣く子すら自身を護るには油斷せざるなり。「油斷大敵。」「小を棄てて大に就け。」「長いものには卷かれよ。」「〔四〕曲らねば世に立たれず。」など、いづれか利益の念を主とせざる。聖人は「知らざるを知らずとせよ。」といひ、俚諺は「知つて知らざれ。」といふ。「鷹は死すとも穗をつまず。」なども氣概を稱揚するもあれど、俚諺の大體の教訓は、「賢かれ損をすな。」といふにあり。

俚諺は事の一面を見てこれを誇張して言ふ傾あるものから、その他面をいふ

世態　世のありさま。

に躊躇せざるが故に、一見その判斷の相反するが如く思はるゝものあれど、かく両面よりいふところ、よく世態人情の實相にかなひて、その判斷概ね公平なり。「すきこそ物の上手なれ。」といへど、「下手の横ずき。」といふことを忘れず。

好尚

「親に似ぬは鬼子。」といへば、「形生めども心は生まず。」といふ。かく事の両面をたゝいて世相の内秘、人情の裏面を穿たんと力むる、これ即ち俚諺が警戒と諷刺とに富める所以にして、中には一言よく人情の裏面を訐きて、巧に罵倒し了するものあるなり。

——大西博士全集——

一三　友道

綱島梁川

友道に最も忌むものは猜忌なり。嫉妬なり。蓋し友は多くは自己と主義、理想、好尚、信仰を同じうするもの、而してその知識、才能に於ても、甚だしき懸隔なきを常とす。げに友は第二の我なり。隨つて起り易きものは嫉妬なり。しかも一たび嫉妬の情生ぜんか、最早貴き

肺肝を披瀝す

友情を味はふ資格なきものと墮せるなり。

我を最もよく知るは友なり。我等は一切の自家秘密を打明け得るものを得て、始めて解脱し超我す。人は知音の爲には身命をも獻げて辭せざらんとするもの、而して此の如き知音は友あるのみ。管仲、鮑叔の事以て徵すべし。故に自己の弱點、秘密を打明け得ざるものは、眞の友を得る能はず。眞我を打出し、肺肝を披瀝して相照らすものにあらざれば、友ある能はず。友を得る第一要件は、公明に我を打明くる勇氣なり。自ら缺陷、弱所を掩ひ包み、恰も栗のいがの如く、ひしと護身の劒戟に身繕ひして、さて友と交るものあり。此の如くして友を得んこと難いかな。

自家の短所を暴露するは友に交る一要件なりと雖も、こは他の最大要件と相須ちての自然の果たるを要す。眞善美の理想に向上せんとする熱情に相合し、この美しき意義に相許して、自他提撕し

て勇猛精進する一事これなり。この高上なる結合ありて、始めて互にその弱點、短所を打明け合うて、相同情し相切磋して進むを得べく、その醜所、暗所は高上なる理想の光もて和げられ、言難き向上の涙もて温めらる。かゝる友道に於ては、自他その短所、弱所を知ることが却つて同情發憤の動力となるなり。

今の世には、何ぞ熱情をもて友を求むるものの少き。世は澆漓、儇薄の流に漂ひて、かゝる美しき熱情をも失へるか。嗚呼、友は人生最高の無價寶なり。花の前、月の下に假初に結べる友垣だにうれしきものなるを、金蘭の友のいかばかり貴きぞ。人は子孫に生き、又は事業に生くといふ。されど眞に生くるは友のみ。眞の我はたゞ友の中にありて生き、榮え、光輝を放つ。

嘗て我が友に、病を得て瞑せんとするに臨み、「我が志を成すものは君なり。我は君によりて生くべし。君それ自愛せよ。」との一語を遺して逝きしものあり。今は憶ひ出づるだに切々の情に堪へず。友の眞義を教へたるもの實にこの一語なりと、我は常に思ふなり。道の友、理想の友のみ眞友なり。されば、ミルが「善人を外にして眞心より自由を愛するものなし。」と言ひし如く、吾人は「善人を外にしては眞心より友を愛するものなし。」と言はんとす。惡人は眞の我即ち理想を有せず、隨つて眞の友あることなし。自家心中に道を有するもの、眞善美の理想を有するものにして、始めてよく友道の大義を盡すべし。同じ理想の佛前に跪禮するものにして、同氣同聲相呼應感孚するを得べきなり。されば嗜好、職業、地位、階級を同じうし、又は利益快樂を同じうするのみにては、友道は決して成るべきにあらず。友道は倫理道德を根柢とす。友を得る道豈容易ならんや。

——梁川全集——

帝國新讀本 卷九 終

附錄

和歌百首

あらたまの年たちかへるあしたより待たるゝものは鶯の聲　素性法師

ゆた〳〵と日かげかづらの長かづら柱に掛けて年ほぐわれは　伊藤左千夫

岩間とぢし氷もけさはとけそめて苔の下水道もとむらん　西行法師

あすよりは若菜摘まんと占めし野に昨日もけふも雪はふりつゝ　山部赤人

空はなほ霞みもやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月　藤原良經

三島江(一)の霜もまだひぬ蘆の葉のつのぐむほどの春風ぞふく　藤原通光

春といへば霞みにけりなきのふまで波間に見えし淡路島山　俊惠法師

を筑波も遠つ足尾もかすむなり嶺こし山こし春や來ぬらん　賀茂眞淵

鶯のあかつきおきの初ごゑに今はとしらむ春の夜の月　香川景樹

つく〳〵と春のながめの寂しきはしのぶにつたふ軒の玉水　僧行慶

大空は梅のにほひにかすみつゝ曇りもはてぬ春の夜の月　藤原定家

(一)攝津國三島郡三個牧村。淀川の西岸。

ちなゐ　兒童をいふ。

(一)京都嵐山の下を流れる。保津川の下流、桂川の上流。

空に知られぬ　散る花を雪に見たてたのである。

初瀬野や里のうなゐに宿とへば霞める梅のたちえをぞさす　契沖

大堰川(一)月と花とのおぼろ夜にひとり霞まぬ涙のおとかな　小澤蘆庵

宿かさぬ人のつらさをなさけにて朧月夜の花のしたぶし　蓮月

あをによし奈良の都は咲く花の匂ふがごとくいま盛なり　小野老

緋縅の鎧をつけて太刀はきて見ばやとぞおもふ山櫻花　落合直文

薄墨にかく玉章と見ゆるかな霞みてかへる春のかりがね　津守國基

春來てぞ人も訪ひける山里は花こそ宿のあるじなりけれ　藤原公任

梅が香をさくらの花に匂はせて柳が枝にさかせてしがな　中原致時

み吉野のさくら咲きけり帝王の上なきに似る春の花かな　與謝野晶子

櫻ちる木のした風は寒からで空に知られぬ雪ぞふりける　紀貫之

櫻狩雨はふりきぬ同じくはぬるとも花のかげにかくれん　讀人知らず

夕月夜汐みち來らし難波江の蘆のわか葉をこゆるしら波　藤原秀能

殿守のともものみやつこ心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな　源公忠

風いでて高く林の鳴る音をわりなく春の晝にきくかな　金子薫園

ゆふぐれの庭　春風に花の靜かに散る夕暮の方が反つてさびしいとの意。

一重は蜑の　この霞の一重は蜑の鹽をやく煙であつた。

(一)攝津國東成郡。

(二)龍田川の一名。大和國生駒川の下流。

待たじと思へば　あきらめて待つまいと思へば、生憎に杜鵑の啼きさうな雨もよひの空になつて來た。

荻の葉の身にしむよりも春風の花に聲なきゆふぐれの庭　松平定信

大堰川かへらぬ水に影見えて今年も咲ける山ざくらかな　香川景樹

すみだ川蓑きて下す筏士にかすむあしたの雨をこそ知れ　加藤千蔭

藻鹽やく難波の浦の八重霞一重は蜑のしわざなりけり　契沖

奈吳(一)の海の霞の間よりながむれば入日をあらふ沖つ白波　後德大寺實定

散る花とともに流れて若あゆのぼる早瀨に春のくれゆく　鳥野幸次

かはづ鳴く神奈備(二)川にかげ見えて今や咲くらん山吹の花　厚見王

榛の木にからす芽を食む頃なれや雲山を出でて人畑を打つ　正岡子規

夜もすがらはかなく叩く水鷄かなさせる戸もなき柴の假屋を　源雅光

露すがる庭の玉ざゝうちなびきひとむら過ぎぬゆふだちの雲　藤原公經

わがゆくは離小島の朝じめりたかむら蔭のすゞしき路ぞ　土岐善麿

いづ方に鳴きてゆくらん杜鵑淀のわたりのまだ夜深きに　壬生忠見

いかにせん來ぬ夜あまたの杜鵑待たじと思へば村雨の空　藤原家隆

橘のかをれる宿のゆふぐれに二聲なきて行くほとぎす　賀茂眞淵

祭　祇園祭（七月十七日）

大文字　八月十六日、舊盆の夜、京都東山如意嶽に大文字の形の火を焚く。

(二)近江國滋賀郡。琵琶湖の西岸。

聞くたびに珍しければ杜鵑いつも初音のこゝちこそすれ　權僧正永緣

より來りうすれて消ゆる水無月の雲たえまなし富士の山邊に　若山牧水

かも川の草青き洲に風わたりさゞ波ぞたつ細き流に　金子元臣

蓮葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく　僧正遍昭

この世にもこの世のものと見えぬかな蓮の露にやどる月かげ　藤原定家

風ふけばはすのうき葉に玉こえて涼しくなりぬひぐらしの聲　源俊頼

小松原雨の名殘の露ながらたもとにさはる青き松かさ　島木赤彥

松かげの岩井の水を掬びあげて夏なき年とおもひけるかな　讀人知らず

祭すぎ大文字すぎ夏もゆくいとあわたゞし京の暦は　吉井勇

夏山に鳴くなる蟬の木がくれて秋ちかしとやこゑもをしまぬ　源實朝

ほのかにも庭木の梢ゆれのこり恐しき日は夕せまれり（九月一日）　尾上八郎

うづら鳴く(二)眞野の入江の濱風に尾花なみ寄る秋のゆふぐれ　源俊頼

濡れてほす山路の菊の露のまにいつか千年を我は經にけん　素性法師

目になれし山にはあれど秋來れば神や住まんとかしこみて見る　石川啄木

いかばかり吹く云々　上流から紅葉の多く流れて來るのでいふ。

白雲に羽うちかはしとぶ雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月　讀人知らず

水の面にてる月なみをかぞふれば今宵ぞ秋のもなかなりける　源順

忘れじな難波の秋の夜半の空こと浦にすむ月は見るとも　宜秋門院丹後

住吉の松を秋風吹くからにこゑうち添ふる冲つ白浪　凡河内躬恒

大船のけぶりの外に雲もなきあをうな原に秋風ぞ吹く　小出粲

秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくる蜘蛛の絲すぢ　文屋朝康

武藏野は月の入るべき山もなし尾花がすゑにかゝる白雲　源通方

水色の鎌倉山の秋かぜに銀杏ちりしく石のきざはし　與謝野寛

みる人もなくて散りぬる奥山のもみぢは夜の錦なりけり　紀貫之

下紅葉かつ散る山の夕時雨ぬれてやひとり鹿のなくらん　藤原家隆

龍田川もみぢみだれて流るめりわたらば錦中や絶えなん　讀人知らず

山里は秋こそ殊にわびしけれ鹿のなく音に目をさましつゝ　壬生忠岑

月あかきもみづる山に小猿ども天つ領巾なご欲りしてをらん　齋藤茂吉

筏士よ待てことはん水上はいかばかり吹く山のあらしぞ　藤原資宗

暮るゝより松に吹立つわが山のあらしの末を誰か聞くらん　香川景樹

荒熊はゆくへもしらず杉山のうつぼに籠るこがらしの風　加納諸平

冬鴉くろく大きく麥畑の上に影ひき飛びさりにけり　前田夕暮

みやまには霰ふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり　讀人知らず

淋しさに煙をだにもたえじとて柴折りくぶる冬の山里　和泉式部

煙をだに煙だけでもたやすまいと。

木の葉ちる宿は聞きわくことぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も　源頼實

み吉野の山かき曇り雪ふればふもとの里はうちしぐれつゝ　俊惠法師

夕されば海上がたの冲つ風雲ゐに吹きて千鳥なくなり　賀茂眞淵

近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへおもほゆ　柿本人麿

心もしぬに心がしたれて。天智天皇の大津の都を思ひ出したのである。

駒とめて袖うちはらふ蔭もなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ　藤原定家

(一)紀伊國東牟婁郡三輪崎村大字佐野。

大道ゆく人の絶間におりたちてあさる雀のいそがしげなる　東坊城德長

木の枝に雀一列ならびゐてひとつびとつにものいふあはれ　北原白秋

きのふといひけふと暮して飛鳥川ながれて早き月日なりけり　春道列樹

(二)大和國高市郡。稲淵山に發し初瀬川に合する。

あす知らぬ我が身と思へどくれぬ間のけふは人こそ悲しかりけれ　紀貫之

うち笑みて膝にはひよるかなしさはわが子人の子變らざりけり　高崎正風

天の原てる日のちかき富士の嶺に今も神代の雪はのこれり　加藤枝直

しき島のやまと心を形もて見するに似たり富士の神山　千葉胤明

夜もすがら富士の高嶺に雪きえて清見が關にすめる月影　藤原顯輔

心あてに見し白雲は麓にて思はぬ空に晴るゝ富士の嶺　村田春海

紫の一本ゆゑに武藏野の草は皆がらあはれとぞ見る　讀人知らず

杉垣の下をくゞりてやり水のうき世にいづる聲きこゆなり　井上通泰

草も木もわが大君の國なればいづくか鬼のすみかなるべき　紀友雄

かやぶきの伏屋の軒になびけども尊く見ゆる日の御旗かな　入江爲守

千歳までかぎれる松もけふよりは君にひかれて萬代や經ん　大中臣能宣

十かへりの花さく松にすみなれていくたびたづは千世よばふらん　黑田清綱

筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君がみ蔭にます蔭はなし　讀人知らず

橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいや常磐の木　聖武天皇

海ゆかば水づく屍山ゆかば草むす屍大君の邊にこそ死なめ顧はせじ　讀人知らず

醜の御楯　卑しい身ながら君國の干城となつて。

語りつぐがね　語りつぐやうに。

けふよりは顧なくて大君の醜の御楯と出で立つ我は　今奉部與曾布
しき島のやまとの國をつくりなす一人とわれををしまざらめや　佐々木信綱
もののふの取傳へたる梓弓引きては人のかへすものかは　梶原景季
大丈夫は名をし立つべし後の世に聞きつぐ人も語りつぐがね　大伴家持
これのみぞ人の國よりつたはらで神代をうけし敷島の道　藤原爲相

帝國新讀本卷九附錄終

第五学年
島田[illegible]

大正十三年十一月三日印刷
大正十三年十一月六日發行
大正十四年二月十二日訂正再版印刷
大正十四年二月十四日訂正再版發行

（帝國新讀本）

定價	
自卷一至卷四各	金四拾八錢
卷五卷七各	金四拾參錢
卷六卷八各	金四拾貳錢
卷九卷十各	金參拾七錢

大度正臨十時六定年價	
自卷一至卷四各	金八拾二錢
卷五卷七各	金七拾三錢
卷六卷八各	金七拾一錢
卷九卷十各	金六拾三錢

著作權所有

編者　芳賀矢一

發行兼印刷者　東京市神田區通神保町九番地　合資會社　冨山房

代表者　合資會社冨山房社長　坂本嘉治馬

印刷所　東京市小石川區音羽町六丁目　冨山房印刷工場

發行所　東京神田區通神保町九番地　合資會社　冨山房

電話大手六三七〇、七〇二三番
振替東京五〇〇一番

FIFTH YEAR CLASS
H. SHINAGA

文庫
25
897

広島大学図書
2000066897